

博士論文

悲観性の二側面と達成動機との関連について

—比較文化的視点から—

福沢愛

目次

目次	2
論文要旨	5
博士論文の構成について	8
第一部：悲観性と達成動機との関連に関する探索的研究	10
はじめに	10
若者の意欲に関する社会心理学的検討：楽観性の文化 間での機能的等価性に着目して	12
達成動機とは	15
楽観性のメリット：心理的 well-being の維持と達成場 面における機能について	16
楽観性と達成動機	16
比較文化的検討	19
研究 1：2 種類の楽観性と達成動機との関連についての日伊比較	21
目的	21
方法	21
結果	22
考察	25
研究 2：悲観性の二側面と達成動機との関連についての、探索的検討	38
目的	38
方法	39
結果	40
考察	43

第一部のまとめ	48
第二部：悲観性と達成動機の関連のモデルに関する研究	49
研究 3：日本人の間での、内的／外的要因への悲観・コントロール感と達成動機との関連についてのモデル	49
目的	49
方法	53
結果	53
考察	56
研究 4：日本人の間での、内的／外的要因への悲観・コントロール感・方略と達成動機との関連についてのモデル	60
目的	60
方法	63
結果	64
考察	67
研究 5：アメリカ人の中での、悲観性と達成動機との関連のモデルに関する追加調査	69
研究 5-1：アメリカ人大学生の間での、悲観性の二側面・コントロール感・達成動機との関連について	70
目的	70
方法	71
結果	72
考察	73
研究 5-2：アメリカ人大学生の間での、悲観性の二側面・方略・コントロール感・達成動機との関連について	76

目的.....	76
方法.....	76
結果.....	77
考察.....	79
第二部のまとめ _____	81
研究 6：日々の生活における内的／外的悲観と達成動機・心理的 well-being との関連について _____	83
目的.....	83
方法.....	84
結果.....	86
考察.....	90
総合考察 _____	94
引用文献 _____	106
謝辞 _____	115
付録 _____	117
付録 1	117
付録 2:	118
付録 3.....	121
付録 4	123
付録 5.....	126

論文要旨

本研究では、主に悲観性と達成動機との関連を検討し、その関連パターンを日米で比較することを目的とした。主に欧米人を対象とした数々の研究で、楽観性と達成動機との間に正の関連があることが明らかになっている。研究1では、日本人の間で、これまで主に欧米人の間で見られてきた2種類の楽観性（全般的楽観性・領域固有の楽観性）と達成動機との関連を確認した。その結果、日本人の間でもイタリア人の間でも、領域固有の楽観性と達成動機との間には正の関連がみられたが、日本人の間では、全般的楽観性(Life Orientation Test Revisedで測定)は、達成動機と関連が見られなかった。

この文化差の理由の一つとして、楽観性が欧米人と比べて低い日本人の間では、楽観性よりも悲観性が、達成動機と関連を持っているため、という可能性が挙げられる。そのため日本人の間では、どのような楽観性でも達成動機に結びつくわけではなく、達成動機に結びつく楽観性と結びつかない楽観性があったと考えられる。近年、楽観性だけではなく悲観性のメリットに関する研究が見られているが、悲観性と達成動機との関連を指摘する先行研究には、未検討点が存在する。それは、具体的にはどの側面に関する悲観性が達成動機と関連するのか、また、心理的 well-being を保ちつつ、かつ達成動機を維持する悲観性がどのようなものであるかが分かっていない点である。

そこで研究2では、研究1の再検討をするとともに、悲観性を内的要因への悲観と外的要因への悲観の2種類に分け、達成動機との関連を探索的に検討した。その結果、日本人の間でもアメリカ人の間でも、内的要因への悲観は低いほど達成動機が高いことが明らかになった。しかし、日本人の間でのみ、外的要因への悲観は逆に高いほど、達成動機が高いことが明らかになった。また、日本人の間では、外的要因への悲観の達成動機への予測力は、楽観性よりも大きかった。しかしアメリカ人の間では、内的要因への悲観も外的要因への悲観も、同様に達成

動機と負の関連をもっていた。このことから、日本人の間では、悲観をする側面の違いによって達成動機との関連パターンが大きく異なることが明らかになり、以降の研究では特に、二つに分類した悲観性の達成場面における機能について、詳細な検討が必要であることが示唆された。

研究 3、研究 4 では、日本人の間で、悲観性と達成動機との関連のモデルを完成させることを目的とした。パス解析の結果、内的要因への悲観はコントロール感や、積極的方略との間に負の関連を持っていた。一方で外的要因への悲観は、コントロール感とは有意な関連が見られなかったが、積極的方略との間には正の関連を持ち、達成動機に正に結びついていた。これらのことから、日本人の間では、内的要因への悲観を低く持ち、外的要因への悲観を高く持つことが、達成動機を維持する方略であると言えた。

研究 5（研究 5-1、研究 5-2）では、この傾向が欧米人の間でも見られるのかを検討するために、アメリカ人大学生を対象に同様の調査を行った。その結果、アメリカ人の間でも、内的要因への悲観からの、コントロール感、積極的方略、達成動機へのパスは、日本人の間と同様であった。しかしアメリカ人の間では、外的要因への悲観は、達成に関するどの変数との間にも有意な関連を持たなかった。これらのことから、外的要因への悲観は日本人の間でのみ、達成場面における積極的方略として機能し、達成動機へと結びつく変数であったと言える。

続く研究 6 では、心理的 well-being に着目した。研究 2 から研究 5 までで、日本人の間では、外的要因への悲観をすることが、達成場面では適応的な機能を持つということが明らかになった。しかし悲観性のメリットに関する先行研究においては、達成場面における悲観は、一時的には適応的な機能を持つものの、長期的には心理的 well-being を保てず非適応的であるという指摘もなされている。そこで、日本人の間で、心理的 well-being を保つという面においても、外的要因への悲観が適応的であるのかを検討するため、研究 6 では日記式調査を行った。その結果、ある一日にネガティブな出来事を経験した時、ネガティブ気分が高く

なる度合が、外的要因への悲観が高い人ほど小さい、という結果が、日本人の間でのみ見られた。すなわち日本人の間で、外的要因への悲観が高い人は、ある日にネガティブな出来事を経験しても、それによる気分への脅威が小さい、と言える。これらのことから、日本人の間では、外的要因への悲観は、心理的 well-being を保ちつつ達成動機を維持することのできる性質を持つ悲観である、ということが示唆された。一方でアメリカ人の間では、外的要因への悲観はネガティブ気分の 6 日間の平均値との間に正の関連を持ち、また、一日のネガティブな学業的出来事からネガティブ気分への傾きに対して、外的要因への悲観が正の関連を持つ、という、日本人の間とは真逆の結果となった。これらのことから、外的要因への悲観は日本人の間では心理的 well-being を脅かさず、むしろネガティブな出来事を経験したときのレジリエンシー機能があるが、アメリカ人の間では、外的要因に悲観をしていることは心理的 well-being を阻害するものであるということが言える。これらのことから、日本人にとっては外的要因への悲観が、心理的 well-being を保ちつつ達成動機を維持することができる悲観であるということが分かった。

これは、これまでの悲観性のメリットに関する研究に新たな知見を加える結果であったと考えられる。そして、現在や将来の自己に対する評価が欧米人に比べて低いとされてきた東アジア人の間でも、達成場面での適応につながる、欧米人とは異なる独自のルートがあるということが明らかになった。更に、日本人の間で、外的要因への悲観という一次的コントロールではない変数が、達成場面で機能的に働くという、これまでの研究に新たな知見を加える結果となった。

博士論文の構成について

博士論文は、全部で第三部から成り立っている。第一部は、研究 1 と研究 2 により、第二部は、研究 3～研究 5 により、第三部は、研究 6 と総合考察で構成されている。第一部の目的は、楽観性と達成動機との関連というこれまでの知見が日本でも見られるのかを確認することである（研究 1）。この研究 1 で文化差が見られたため、探索的に、二種類の悲観性と達成動機との関連を検討した（研究 2）。続く第二部の前半では、日本人大学生を対象に、悲観性と達成動機との関連に関するモデルの構築を目的とし（研究 3、4）、研究 5（研究 5-1、研究 5-2）では、アメリカ人大学生の間に追調査を行った。第三部は、日本人の間で外的要因への悲観が他の変数に対しても適応的な機能を持つのかを確認するため、心理的 well-being の観点から考察を行った。そして、日本人の間では、外的要因への悲観が心理的 well-being を脅かさず達成動機を保つことのできる悲観性である、という結論を、日記式調査による実証的な検討によって示した（研究 6）。表 1 に、各研究の結果と結果の概要をまとめた。

表 1. 各研究の目的と結果の概要

	目的	結果の概要
第一部① 研究 1	楽観性と達成動機の間を日伊で比較し、先行研究の傾向が日本でみられるかを確認	日本人の間では、楽観性の種類によって達成動機との関連が異なっていた。
第一部② 研究 2	悲観性の種類によって、達成動機との関連が異なるのかを探索的に検討	日本人の間でのみ、外的要因への悲観と達成動機との間に正の関連が見られた。
第二部① 研究 3・ 研究 4	日本人の間で、内的／外的要因への悲観と達成動機との関連についてモデルの構築	日本人の間では、外的要因への悲観をすることが、コントロール感に関係なく達成動機を維持する適応的な方略であるということが分かった。

<p>第二部② 研究 5 (研究 5-1、研究 5-2)</p>	<p>研究 2～5 の結果がアメリカ人の間でも見られるのか追調査</p>	<p>内的要因への悲観の関連パターンは日本人の間と同様だが、外的要因への悲観は達成に関する変数との関連が見られなかった。</p>
<p>第三部 (研究 6・総合考察)</p>	<p>日本人の間で、本当に外的要因への悲観が適応的であるのかを検討するため、心理的 well-being の観点から考察</p>	<p>アメリカ人の間では、外的要因への悲観は心理的 well-being を脅かすのに対し、日本人の間では、外的要因への悲観はネガティブな出来事からのレジリエンシーとして、心理的 well-being に対しても肯定的に機能していた。</p>

第一部：悲観性と達成動機との関連に関する探索的研究

はじめに

一般的に、日本人を含む東アジア人は欧米人よりも、現在や未来の自分自身に対して肯定的な評価をする度合いが低いと言われている。近年、人間の強みや肯定的な性質、また、過去・現在・未来への肯定的な評価に関して検討する「ポジティブ心理学」の領域が注目されているが (Seligman & Csikszentmihalyi, 2000)、自己に対する肯定的評価の度合いが低い東アジア人は、欧米人に比べて非適応的なのだろうか。この疑問にこたえるのが、「何によって肯定的な性質につながるのか」という、規定因に関する議論である。過去の研究において、人生満足度を規定する要因が文化によって異なることや(Diener & Diener, 1995)、欧米人の間では否定的なものとして扱われている「罪悪感」などの概念が、東アジア人の間では否定的にみられる度合いが低いこと(Eid & Diener, 2001)などが指摘されている。こうした文化差について大石(2011)は、否定的なものに目を向けることは、成長につながるという肯定的な側面もあるため、文化によっては非適応的ではないこともある、と論じている。つまり、東アジア人にとって肯定的または否定的な帰結につながる変数と、欧米人にとって肯定的または否定的な帰結につながる変数とに、文化差があるということが考えられる。

そして、特に日本人の間で、自己の持つ否定的な側面に目を向けないことが、時に人の適応を阻害する可能性があることも指摘されている。社会学者の山田昌弘は、著書の「希望格差社会」(2007)において、「努力が報われない」と感じた若者たちの間で、希望や意欲が減退していく日本の現状を指摘している。そして、将来の自分自身に対して希望を持つことができる若者と持つことができない若者との差が、大きくなっていることを指摘した。しかし同時に、将来悪い結果になる可能性を考えないことによる危険性も指摘しており、フリーターやパラサ

イトシングルの増加は、「運頼み」にしている若者の増加によるものである、としている。たとえば、夢のために定職につかない若者は、夢がかなわなかった時のことを考えない。このように、悪い結果が起こらない可能性もあるために、その可能性に賭けることは、結果的に「努力をしても無駄だ」という考えに結びつき、意欲の低下につながる、と山田は指摘する。「希望を持つことが良いこと」とされる一方で、「運」などの要因に対して希望を持つことは適応的な結果を導かないという、一見逆説的な議論がなされているのである。これらのことから、希望の中にも適応的な希望と非適応的な希望とが存在し、運頼みにせず、自分自身の力で努力をしようという意欲を保つことが必要である、と言える。

実際のデータでも、日本の若者の間では、その意欲が減退している、ということが示されている。中央教育審議会における答申において、日本の高校生が、諸外国の高校生と比べて学習時間や学ぶ内容への興味が低いこと、将来よりも今の生活を重視する者が、親世代と比較して多いこと、フリーターやニートの数の増加、といった観点から、日本の若者の学習意欲が低下している、という懸念が示されている（平成19年 中央教育審議会答申）。中央教育審議会答申ではその背景として、若者が日本の将来の社会状況や職場環境に対して希望や期待を持っていないためだ、と主張されている。しかし、前述した山田(2007)のように、日本の将来の社会状況や職場環境などに対して希望や期待を持てたとしても、それに対して安心してしまい、運頼みにすることもまた非適応的であるという指摘もある。

日本の若者が社会状況に対して希望が持てない現代社会において、若者たちが意欲的に生活をするには、自身の将来に対して、どのような認識を持てばよいのだろうか。日本人の意欲の規定因と、アメリカやイタリアなど欧米の若者の間での意欲の規定因とを、比較しながら検討することが、本研究の大きな目的である。前述したように、東アジア人の間では、何が肯定的な性質につながるのか、つまり肯定的な性質の規定因が、欧米人の間とは異なる可能性が指摘されている

(e.g., Diener et al., 1995)。そのため、日本人の若者の間で意欲につながる変数も、欧米人の間とは異なる可能性がある。具体的には、意欲を保つために希望を持っておいた方が良い側面と、持たない方が良い側面があると考えられる。本研究では主に日本人大学生を対象として、その側面について詳細な検討を行う。

若者の意欲に関する社会心理学的検討：楽観性の文化間での機能的等価性に着目して

社会心理学では、学習への意欲は「達成動機」という名称で扱われており、将来への希望は、「楽観性」という名称で扱われている。そして多くの研究で、将来に対する楽観性を持つことが、達成動機につながる、と示されている。しかし前述したように、日本人を含む東アジア人の間では、欧米人に比べて元々将来への楽観性が低いとされている。このような東アジア人の中で達成動機を保つには、将来に対してどのような認識を持つことが必要となるのか、本研究では実証的に検討する。

東アジア人は一般的に欧米人に比べて、現在や将来の自己に対して否定的な評価をする傾向があることが、数々の研究で報告されている。たとえば現在の自己への評価の指標の一つである、顕在的自尊心の数値が欧米人に比べて低いことが示されている(Heine, Lehman, Markus, & Kitayama, 1999)。将来の自己への評価に関しても同様のことが言え、たとえばポジティブな出来事やネガティブな出来事に対して、東アジア人は、欧米人に比べて悲観的に解釈をすることが指摘されている(e.g., Lee & Seligman, 1997)。

このように、既存の尺度を用いて測定される、現在や将来の自己に対する肯定的な評価の得点が、日本人を含む東アジア人の中で低いということは否定できない。しかしながら、その低い数値の解釈に関しては、未だ検討の余地がある。たとえば、現在の自己に対する評価が東アジア人の中で低い理由について、「東ア

ジア人が自尊心を必要としないためである」とする主張がある一方で(e.g., Heine et al., 1999)、それに反論して、「東アジア人の間でも自尊心は重要なものである」とする主張もある。たとえば、東アジアには謙遜の文化があるため、尺度で測定された顕在的自尊心は低い、IAT (Implicit Association Test)で測定された、潜在的な自尊心の水準は欧米人と同様であることが示されている (Yamaguchi, Greenwald, Banaji, Murakami, Chen, et al., 2007)。

更に、東アジア人の間では、尺度で測定された変数の平均値自体は欧米人よりも低いものの、変数の機能自体は欧米人と同様である、とする指摘もある。ある変数が、他の変数との間に文化間で共通したネットワークを持つことを、その変数の functional equivalence (機能的等価性) と呼ぶ(Fontaine, 2005)。この機能的等価性は、ある変数と他の変数との間の相関パターンが、文化間で同様であるか否かを調べることによって検討される。たとえば Yamaguchi, Lin, Morio, & Okumura (2008)は、自尊心尺度の機能的等価性を調べるためにメタ分析を行い、Rosenberg (1965)の自尊心尺度で測定された自尊心得点と、心理的 well-being、学業成績などとの相関パターンを、東アジアと欧米で比較した。その結果、自尊心と他の変数との間の相関パターンには文化的普遍性があり、自尊心の機能的等価性が示されたのである。

将来への評価である楽観性に関しても同様に、東アジア人の中での尺度得点自体は低くても、その機能は等価である可能性が考えられる。楽観性には、心理的 well-being を保つ、達成動機や努力量を保つ、などのメリットがあることが、主に欧米人の中で指摘されてきた (see a review of Carver & Scheier, 2014)。前述したように、東アジア人は、欧米人に比べ、尺度で測定される楽観性得点は低い。しかしながら、楽観性と正の結びつきを持つ、心理的 well-being や達成動機を、東アジア人が必要としていない、という結果が、これまでに見られたわけではない。そのため、東アジア人の間でも楽観性は重要なものであり、欧米人の間

と同様の関連パターンを持つ可能性がある。すなわち、楽観性にも、機能的等価性があるのではないかと考えられる。

実際に、東アジア人、特に日本人の間でも、楽観性がストレス反応の抑制やレジリエンス（石毛・無藤, 2005）、主観的幸福感（橋本・子安, 2011）といった心理的 well-being と、正の関連を持つということが示されている。そのため、心理的 well-being を保つ、という楽観性の機能は、文化的に普遍であると考えられる。しかしながら、試験や課題解決場面など、達成場面における楽観性の機能に関する研究は、東アジア人の間ではまだ多く行われていない。そこで本研究ではまず、特に達成場面における、楽観性の機能的等価性を検討する。

しかしながら、前述したように、何が肯定的な性質につながるのか、その規定因に文化差があることも考えられるため（大石, 2001）、達成場面においては、東アジア人の間では楽観性とは別の変数が、肯定的な機能を持つ可能性もある。なぜなら近年、楽観性だけではなく悲観性もまた、達成場面では適応的な機能を持つことが指摘されているためである(e.g., Norem & Cantor, 1986)。そのため、欧米人に比べて悲観的である東アジア人の中では(e.g., Lee et al., 1997)、楽観性ではなく悲観性の方が、特に達成場面では、有効に機能する可能性も考えられる。しかし、悲観性と達成動機との関連について、東アジア人の中での研究は、まだ多く行われていない。

日本人を含む東アジア人にとっては、何が達成場面で肯定的な機能を持つのだろうか。そのパターンは、欧米人と同様であるのだろうか。具体的には、将来に対する認識をどのように持つことが、達成場面で最も適応的であるのか、本研究では比較文化的視点を取り入れて検討する。東アジア人の中でも特に日本人を対象にして、最終的には、日本人大学生が達成場面において、心理的 well-being を保ちつつ達成動機を維持する方略について検討することが目的である。これ以降の段落ではまず、社会心理学の分野で達成動機や楽観性というそれぞれの概念がどのように扱われているのかを示し、研究1までの導入とする。

達成動機とは

達成動機は、目標に向けた行動を誘発する誘因であり、失敗を避けて成功しようとする意欲、と定義されている(e.g., Atkinson, 1957; Atkinson, 1964; Elliot & Church, 1997)。達成動機の位置づけや測定方法は、研究によって様々である。第一に、尺度によって、個人の一般的で安定的な達成動機を測定する方法である(Lang & Fries, 2006; 堀野・森, 1991)。複数の尺度が存在しているが、どの尺度も、達成動機を複数の因子に分類している。たとえば堀野ら(1991)は、他者と競争をして勝ち、社会から認められることを目指す競争的達成動機と、他者からの評価にとらわれず、自己なりの達成を目指す自己充實的達成動機の二因子構造を指摘している。

尺度による測定に対して、「この一週間で、どの程度頻繁に、意欲がない(unmotivated)と感じましたか」と尋ねる方法や(Solberg, Evans, & Segerstrom, 2009)、ある課題に対して、「同じ課題を続けてやりたいと思えますか」と尋ねる方法(Pulfrey, Darnon, & Butera, 2013)、ある一日における達成動機を、「試験で良い成績をとることに對して、今、どの程度動機付けられていますか」と尋ねて測定するなど(Kernis, Brockner, & Frankel, 1989)、達成動機を、単項目や少ない項目で測定する方法もある。本研究においては、試験への達成動機、失敗経験をした後の達成動機、学業全般に対する達成動機、翌日の学業に関する達成動機など、安定的な個人差としての達成動機よりも、状況特有の達成動機を多く扱う。そして、達成場面における実際の努力量の予測値として、達成動機を扱う。そのため本研究では、達成動機を安定的なものにとらえて複数因子に分類する尺度は使わず、Solberg et al. (2009)や Pulfrey et al. (2013)のように、単項目で達成動機を測定することとする。

達成動機は成功に向けての行動を誘発し、また実際の学業成績の高さや退学率の低さとも結びつくため(e.g., Solberg et al., 2009)、これまでの心理学の研究では、教育現場等で、どのようにして学生の達成動機を保つのかについて、検討がなされてきた(Ames, 1992; Elliot et al., 1997)。達成動機の規定因のひとつとして注目されているのが、楽観性である。

楽観性のメリット：心理的 well-being の維持と達成場面における機能について

心理学では楽観性は多くの研究で扱われており、楽観性を保つことによる、数々のメリットが指摘されている。第一のメリットが、心理的 well-being を保つことである。たとえば Scheier & Carver (1992)は、尺度で測定された楽観性を高く持つ人は、心理的 well-being が高く、またストレス状況において積極的なコーピングを行う傾向が高いことを指摘している。乳がん患者を対象にした調査では、楽観性が高い人の方が低い人に比べて心理的 well-being が高いことが示されている (Carver, Pozo, Harris, Noriega, Scheier, Robinson, et al., 1993)。

楽観性の第二のメリットは、達成場面においても肯定的な機能を持つことである。たとえば、楽観性の高い人は、失敗をした後でもその課題になお取り組もうとする傾向が、悲観的な人よりも高いことが示されている(Carver & Scheier, 1998)。

楽観性と達成動機

更に、課題に取り組む前の、達成動機を保つためにもまた、楽観性は肯定的な機能を持つと指摘されている。達成動機に結びつく楽観性として、心理学では、

大きく分けて 2 種類の楽観性が扱われている。第一に領域固有の楽観性、第二に、全般的な楽観性である。

領域固有の楽観性としては、「達成」という領域に関する楽観性を扱う研究が多い(e.g., Solberg et al., 2009)。領域固有の楽観性の測定尺度は研究によってさまざまであり、数学の試験などといった特定の状況において、「あなたは今年、どの程度数学で良い成績をとれるだろうと思いますか？」と尋ねたり(Wigfield & Eccles, 2000)、学習全般に関して、「私は他のほとんどのクラスメイトと比べて、成功できないだろう」という逆転項目で尋ねる方法(Solberg et al., 2009)などが用いられている。

一方で、全般的楽観性は、自らの将来に対して全般的に肯定的な期待を持つ程度のことを指し、自分には悪いことよりも良いことが起こるだろう、と考える傾向であると定義される(e.g., Carver, Scheier, & Segerstrom, 2000)。この全般的楽観性とは、広く一般的な期待のことであり、上述した領域固有の楽観性とは異なり、特別な状況のみではなく人生全般に関する楽観性である、とされている(e.g., Scheier et al., 1992)。全般的楽観性は多くの場合、Scheier らが作成した、Life Orientation Test Revised (以下、LOTR) (Scheier, Carver, & Bridges, 1994)で測定される。

先行研究では、領域固有の楽観性も全般的楽観性も、どちらも同様に、達成動機との間に正の関連があることが指摘されている。領域固有の楽観性と達成動機との関連については、古典的な Atkinson の研究に始まり複数の研究が行われている。まず Atkinson (1964)は、期待価値モデル(expectancy-value model)を提唱した。これによると、達成への努力量に結びつく達成動機は、その課題を達成できるだろうという期待の度合と、その課題を達成することの重要さ(価値)の積によって算出できる、と指摘されている。すなわち期待価値モデルでは、課題という領域固有の楽観性と、その課題への重要さとが、達成動機と正の関連を持つことを示しているのである。

この Atkinson のモデルでは、楽観性と価値は相補的に達成動機に結びつくものであると指摘されていたが、この見解はのちに Eccles らによって否定されている(Eccles, Adler, Futterman, Goff, Kaczala, Meece, et al., 1983)。そして、達成に関する期待も、課題の重要さもそれぞれが独立に達成動機に結びついているとされている。この Eccles らによって提唱された期待価値モデルは、特に現代的期待価値理論(modern expectancy-value theories)と名付けられている。数多くの研究が、この期待価値理論に基づいた研究を行っているが、共通して指摘されているのは、将来の遂行に対する肯定的な期待、すなわち領域固有の楽観性が高いほど、達成動機が高い、という点である。この期待価値理論に基づき、特定の課題の遂行結果に関する楽観性は、達成動機や努力量と正の関連があることや、(e.g., Atkinson, 1964)、学業に関する楽観性(Academic Optimism)が達成動機と正の関連を持つこと(Solberg et al., 2009)が、複数の研究で指摘されている。

Atkinson の弟子の Weiner (1985)も、古典的な期待価値モデルを基にして帰属理論(attribution theory)を提唱した。Weiner もまた、将来の達成への楽観性、という領域固有の楽観性が達成動機と正の関連を持つとしており、その将来の達成への楽観性の規定因となるのが、過去の達成結果への原因帰属であるとした。具体的には、過去の失敗の原因を、能力などの安定した要因に帰属すると、将来的にも成功できると楽観視できないために達成動機が下がり、逆に課題の難しさなどの不安定な要因に帰属すると、将来的には成功できると楽観することができるため、将来の課題への達成動機が上がる、と指摘している。Weiner の原因帰属理論は、領域固有の楽観性自体の規定因を示すための理論であるが、その理論の基となるのが、楽観性が達成動機に結びつく、という期待価値理論なのである。

LOTR で測定される全般的楽観性に関しても、領域固有の楽観性と同様の傾向が指摘されている。Scheier らもまた、期待価値モデルに言及しており、LOTR

で測定される全般的楽観性（以下、LOTR 楽観性）が、達成場面における努力量や達成動機と正の結びつきがあることが示されている(Carver et al., 1998; Solberg et al., 2009)。

総合すると、これまでの期待価値モデルに基づく複数の研究は、達成という領域固有の楽観性と全般的楽観性という二種類の楽観性が、いずれも達成動機や努力量と正の関連を持つ、ということを示唆している。

しかしながら、領域固有の楽観性と全般的楽観性とは、達成動機との関連パターンが異なる、との指摘もなされている。たとえば Solberg et al. (2009)の研究では、全般的楽観性と達成という領域固有の楽観性は、共に達成動機との間に正の関連をもっていたものの、全般的楽観性と領域固有の楽観性は別々のものであるため、両方扱うべきだという指摘がされている。更に、高い達成動機の結果である、遂行成績との関連についても、同様のことが指摘されている。たとえば Chang, Bodem, Sanna, and Fabian (2011)では、LOTR で測定された全般的楽観性と、達成や学業分野における領域固有の楽観性とを、独立変数として同時に投入すると、領域固有の楽観性のみが、実際の学業成績に結びついていた。更に Rand, Martin, and Shea (2011)でも、LOTR 楽観性は学業成績との間に有意な関連を持たなかった。これらのことから、達成動機との関連を扱う際には、心理学で扱われている 2 種類の楽観性の両方を測定するべきだと考えられる。そこで本研究においても、まず研究で、達成動機の規定因として、LOTR 楽観性と領域固有の楽観性の両方を扱うこととする。

比較文化的検討

本研究では、比較文化的な検討も行う。前述した 2 種類の楽観性と達成動機との関連に関する研究はいずれも、欧米人を対象としたものが主であった。しかし、欧米人と東アジア人との間には、楽観性に関して文化差があることが、複数

の研究で指摘されている。たとえば、メインランドの中国人は、アジア系アメリカ人や白人系アメリカ人に比べて、良い出来事や悪い出来事に対し、より悲観的な帰属をしていることが明らかになっている(Lee et al., 1997)。更に、日本人は、ヨーロッパ系アメリカ人に比べて、ネガティブな出来事が他者よりも自分により起こるだろうと考える、悲観的なバイアスが高いことが明らかになった(Chang & Asakawa, 2003)。

これらのことを総合すると、東アジア人は欧米人に比べてより楽観性が低いといえる。そのため、達成動機に結びつくと思われる楽観性が低い東アジア人の間でも、楽観性が達成動機の規定因として機能しているのか否かを、調べる必要がある。前述したように、たとえ楽観性の尺度得点自体は東アジア人の方が欧米人よりも低くても、機能的には等価であり、尺度得点と他の変数の相関パターンは同様である可能性がある(Yamaguchi et al., 2008)。すなわち、たとえ東アジア人の中で、楽観性の数値自体が欧米人よりも低かったとしても、その機能、すなわち他の変数との関連パターンは欧米人と同様である、という可能性も考えられるのである。そこで本研究ではまず、達成場面における楽観性の機能的等価性、すなわち楽観性と達成動機との関連パターンを、比較文化的に検討する。

東アジア人、特に日本人を対象としたこれまでの研究には、領域固有の楽観性と達成動機との関連を示したものはあるが(西田・澤, 1993)、LOTRで測定された楽観性と達成動機との関連を示したものはまだない。また、2種類の楽観性それぞれと、達成動機との関連パターンの違いに関する検討も、日本ではいまだに行われていない。

よって研究1では、日本人大学生を対象として領域固有/LOTR楽観性と達成動機との関連を検証することで、これまで主に欧米で見られた、二種類の楽観性と達成動機との関連が、東アジア人の間でも見られるかを検証することとする。その際、欧米におけるこれまでの知見の確認のために、対照群としてイタリア人も含めた。

研究 1 : 2 種類の楽観性と達成動機との関連についての 日伊比較

目的

本研究では、全般的楽観性と領域固有の楽観性という 2 種類の楽観性と達成動機との間には正の関連がある、とする、欧米での先行研究での結果が、東アジア人の間でも見られるかを調べることを目的とした。具体的には、日本人大学生と、対象群としてイタリア人大学生を対象として質問紙調査を行った。東アジア人は欧米人と比べて悲観的である、という結果が複数の論文で見られているため、本研究においても、日本人の間での楽観性はイタリア人の楽観性よりも低いだろうと予測される。しかしながら、たとえある尺度得点の平均値が低かったとしても、その尺度得点と他の変数との関連パターンには文化的普遍性がある、と指摘する研究もある(Yamaguchi et al., 2008)。これらのことから研究 1 では、楽観性の達成場面における機能的等価性を検証するため、日本人の間とイタリア人との間で、2 種類の楽観性と、達成動機との間の関連を検証する。

方法

調査協力者

東京未来大学に通う日本人大学生 77 名（男性 29 名・女性 35 名・不明 13 名 平均年齢 19.48 歳 $SD=0.91$ ）と、ローマ大学に通うイタリア人大学生 189 名（男性 34 名・女性 154 名・不明 1 名 平均年齢 20.74 歳・ $SD = 2.65$ ）が調査に協力した。

測定尺度

LOTR 楽観性は、Life Orientation Test Revised (以下、LOTR) (Scheier, Carver, & Bridges, 1994)で測定した。達成への楽観性、すなわち領域固有の楽観性は、福沢・山口・先崎(2013)より、「将来のことを想像してください。勉強・仕事という側面に関する将来のあなた自身は、将来、どの程度よくなる、または悪くなると思いますか」と尋ね、「1. 悪くなる」～「5. よくなる」の5件法で測定した。達成動機は、勉強や学問の場面で、うまくいかなかった状況を想定させ、「このような状況では、今後同じ課題や科目に続けて取り組もうと、どの程度やる気になるでしょうか」と尋ね、「1. 全くやる気にならないだろう」～「7. 非常にやる気になるだろう」の7件法で測定した。イタリアでの調査で測定した尺度は、いずれもバイリンガルのイタリア人大学院生3名に依頼して、committee approach (Brislin, 1980) によってイタリア語訳を行った。なお、質問紙にはこのほかにも、本研究とは直接関係のない項目も含まれていたが、ここでは記載しない。本研究の分析に使用したすべての項目を、巻末の付録1に記載した。

手続き

いずれの国での調査も、オンライン調査用のシステム REAS (リアルタイム評価支援システム) を用いて行われた。日本でもイタリアでも、いずれも授業終了後に教室に赴き、オンライン調査での15分程度の調査に協力してくれることを依頼した。

結果

LOTR 楽観性尺度の 6 項目に対して因子分析を行い、1 因子構造を確認した。そして、反転項目を処理した後で加算し、LOTR 楽観性得点とした。まず、日本、イタリア両国での、国レベルでの相関関係を調べるため、それぞれの国における LOTR 楽観性と達成動機の平均値を図 1-1 に、達成への楽観性と達成動機の平均値を図 1-2 にプロットした。その結果、図はいずれも、国レベルでのプロットは右肩上がりとなっており、楽観性が高いほど達成動機が高い、という先行研究の結果を支持しているように見える形となった。

一方で、日本人大学生とイタリア人大学生それぞれの、個人レベルでの相関係数と記述統計量を表 1-1 と表 1-2 に、達成動機を従属変数とした、日伊での重回帰分析の結果を表 1-3 に示した。その結果、単純相関に関しては、日伊でほぼ変わらないパターンとなったが、重回帰分析の結果、日本とイタリアとの間で関連パターンに違いが見られた。すなわち、イタリア人の間では 2 種類の楽観性の双方とも達成動機との間に正の関連をもっていたのに対し、日本人の間では、個人レベルでは達成への楽観性（領域固有の楽観性）のみが達成動機との間に正の関連を持っており、LOTR 楽観性は達成動機との間に有意な関連をもっていなかった。

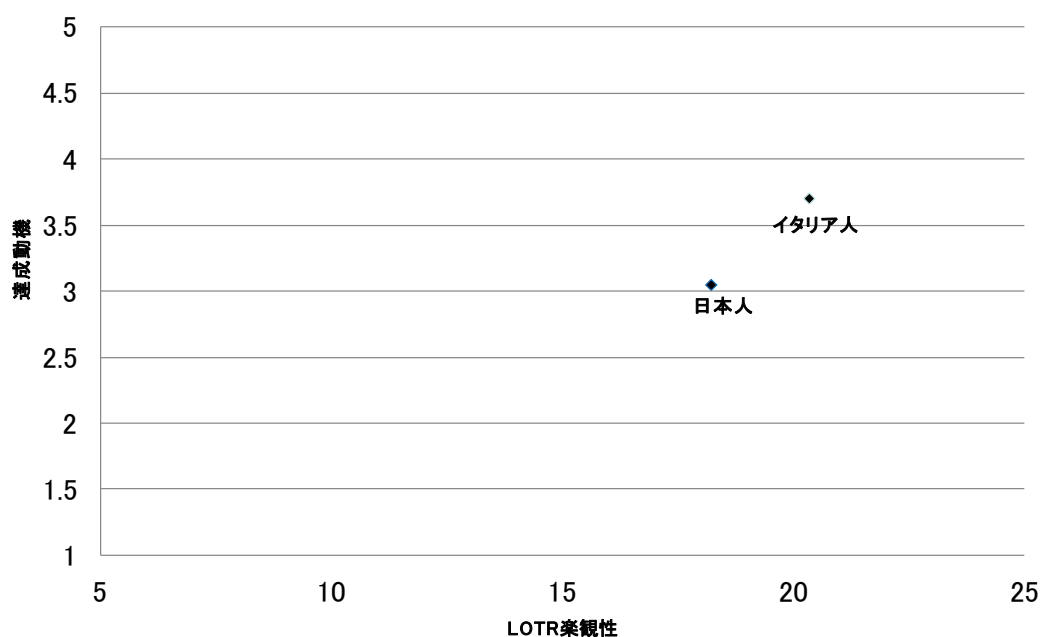


図 1-1. LOTR 楽観性と達成動機との関係 (国レベル)

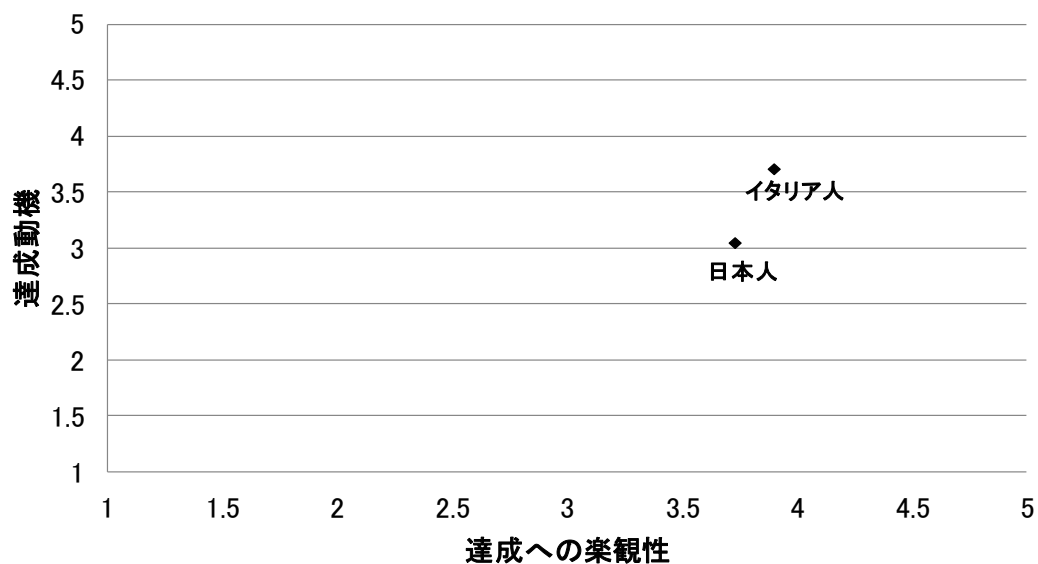


図 1-2. 達成への楽観性と達成動機との関係 (国レベル)

表 1-1. 日本人の間での相関関係と記述統計の表

	1	2	3	<i>M</i>	<i>SD</i>
1. LOTR楽観性	1			18.23	4.59
2. 達成への楽観性	.49 **	1		3.73	0.94
3. 達成動機	.22 †	.52 **	1	3.05	0.97

* $p < .05$, ** $p < .01$, † $p < .10$

表 1-2. イタリア人の間での相関関係と記述統計の表

	1	2	3	<i>M</i>	<i>SD</i>
1. LOTR楽観性	1			20.34	4.40
2. 達成への楽観性	.27 **	1		3.90	0.67
3. 達成動機	.25 **	.19 *	1	3.71	1.00

* $p < .05$, ** $p < .01$, † $p < .10$

表 1-3. 日本人・イタリア人の中での達成動機に関する重回帰分析

	日本	イタリア
LOTR楽観性	-.05	.21 **
達成への楽観性	.55 **	.13 †
<i>R</i>	.52	.28
<i>R</i> ²	.27 **	.08 **
Adjusted <i>R</i> ²	.25	.07

* $p < .05$, ** $p < .01$, † $p < .10$

考察

研究 1 では日本人大学生とイタリア人大学生を対象に、2 種類の楽観性と達成動機との関連を検討した。その結果、国レベルでは先行研究と同様、楽観性が高いほど達成動機も高い、という結果が見られ、すなわち楽観性が低い日本人の間では達成動機も低い、という関連となった。しかし、個人レベルの分析では、日伊で関連パターンに違いが見られた。日本人の間では、LOTR 楽観性は達成動機との間に有意な関連を持たないことが明らかになった。

研究 1 におけるこれらの結果から、集団レベルでの相関関係と個人レベルでの相関関係とが異なる、ecological fallacy (Robinson, 1950)が生じていたと考えられる。そのため、単純に従来の指摘どおり、楽観性と達成動機との間の正の関連

が、文化的に普遍的なものであるとは言えず、各文化内における個人レベルでの相関パターンを比較検討することが、必要であると考えられる。

LOTR 楽観性と達成動機との関連について

研究 1 では、日本人の間では、領域固有の楽観性はイタリア人同様、達成動機と正の関連を持っていた。LOTR 楽観性に関しては、日本人の間では 10%水準ではあったが、達成動機との間に正の単純相関が見られた。このことから、日本人の間でも、LOTR で測定される全般的な楽観性を高く持っていた方が達成動機を保てる、という傾向は、ある程度イタリア人の間と同様であったと考えられる。しかしながら、日本人の間での重回帰分析の結果は、領域固有の楽観性と重ならない、LOTR 楽観性特有の部分は、達成動機と関連しないことを示すものであった。この結果は、イタリア人の間での結果と異なるものであった。

一方、本研究においてはイタリア人の間では、LOTR 楽観性が達成動機と関連していた。ただし、欧米人を対象とした先行研究において、LOTR 楽観性と他の変数との関連パターンは、一貫していない。LOTR 楽観性が、達成動機との間に正の相関があることを示す研究もあれば(e.g., Solberg et al., 2009)、実際の遂行水準とは関連がないため、LOTR 楽観性は達成場面では適応的な機能を持たないとする研究もある(e.g., Chang et al., 2011)。これらのことから、LOTR 楽観性は、東アジア人の間でも欧米人の間でも、達成場面では十分に機能しないという可能性も示唆される。そこで研究 2 では、この LOTR 楽観性と達成動機との関連を再検討しつつ、特に日本人の間でも機能していた、領域固有の楽観性の機能について、詳細に調べてみる必要があると考えられる。

このように、LOTR で測定される全般的楽観性と達成動機との関連に関する先行研究の結果が不安定であるということも考慮しても、研究 1 では、日本人の間とイタリア人の間で、楽観性の達成場面における機能が等価であるとは言えない結果となった。そこで、研究 2 以降では、特に東アジア人の間で、楽観性とは逆

の、悲観性の機能についても調べる必要があると考えられる。楽観性の達成場面における機能について検討する際、東アジア人が欧米人よりも楽観性が低いという事実は、無視できないと考えられるためである。前述したように、東アジア人は欧米人に比べて楽観性が低いということが、先行研究で示されている(e.g., Chang et al., 2003; Heine & Lehman, 1995; Lee et al., 1997)。さらにこの研究 1 においても、日本人の LOTR 楽観性と達成への楽観性の得点は、イタリア人のそれらよりも低かった($t_{(262)} = 3.49, p < .01$; $t_{(264)} = 1.68, p < .10$)。これらのことから、東アジア人は楽観性が低く、相対的に悲観的である、といえる。

楽観性と悲観性は一次元であるのか

ここで問題となるのが、楽観性と悲観性が一次元上にあるのか、という議論である。上述したように、従来の研究では、楽観性が心理的 well-being を保ち、達成場面においても肯定的な機能を持つということが指摘されてきた。そして同時に、悲観的であることは非適応的であるということも指摘されてきた(e.g., Carver et al., 2014)。こうした主張は、楽観性と悲観性を一次元のものとして捉え、楽観性が低いことと悲観性が高いことを、同義として考えていることによるものであるといえる。

しかしながら近年、楽観性と悲観性は一次元的にとらえるのではなく、二次元的にとらえるべきとする指摘がなされている (e.g., 外山, 2013)。それに伴い、楽観性とは独立した、悲観性のメリットを指摘する研究も、近年見られている (e.g., Norem, 2001)。そして、欧米人に比べて悲観的な東アジア人の間では、楽観性よりも悲観性の方が、達成場面で、より効果的に機能するのではないか、と指摘する研究もある (Chang et al., 2003; Hosogoshi & Kodama, 2005; 外山・市原, 2008)。

実際に、悲観性と楽観性とを独立に検討している先行研究において、東アジア人の間では、悲観性の方が達成場面では機能していることを示唆する結果が得ら

れている。アジア系アメリカ人とコケイジアン系アメリカ人を対象にした Chang (1996)の研究では、楽観性と悲観性とを独立に測定し、それぞれの高群と低群とで、コーピング方略を使用する度合を比べている。その結果、アジア系アメリカ人の間でのみ、悲観性が高い人の方が、悲観性が低い人に比べて、ストレス状況に対して問題焦点型コーピング(problem- focused coping) を行った度合が高いことが示された。このことから、東アジア人の間では、悲観性の方が達成場面では肯定的に機能するのではないか、という考察がなされた。

本研究とは異なり、この Chang の研究で扱われていたのは達成動機ではなくコーピングであり、また対象者も、日本人ではなくアジア系アメリカ人であった。しかしながら、問題焦点型コーピングは、コーピングの中でも、達成場面で適応的な機能を持つ方略であると言われている (e.g., Cohen, Ben-Zur, & Rosenfeld, 2008)。このことから、日本人の間でも、楽観性よりも悲観性の方が、達成場面で肯定的な機能を持ち、達成動機を保つ機能を持つ可能性が高いのではないかと考えられる。そして、楽観性よりも悲観性の方が達成動機に対して予測力を持つため、研究 1 において日本人の間では、どのような楽観性であっても達成動機と結びつくわけではなかったのではないかと考えられるのである。

そこで研究 2 では、楽観性だけではなく、悲観性のメリットについても検討する。悲観性のメリットに関するこれまでの研究には、大きく分けて二つの流れが見られる。第一に、防衛的悲観主義に関する研究、第二に、楽観性から悲観性への下方シフトに関する研究である。

悲観性のメリットに関する研究①防衛的悲観主義研究

防衛的悲観主義とは、“過去にはうまくやれていた”、と認識している課題を行う前に、その課題の遂行結果に対する期待をあえて低くもっておき、不安感を原動力にして課題への動機付けを高く持つ傾向、と定義されている(e.g., Norem

& Cantor, 1986; Norem, 2002)。すなわち、悲観性を利用して達成動機を保つ、方略であるといえる。この防衛的悲観主義研究における悲観性は、楽観性とも、また悲観性の中でも安定した性質である特性的悲観性 (dispositional pessimism) とも、分けて考えられている。そのため、たとえば達成場面で悲観的になる人であつても人間関係に関しては楽観的になる、など、悲観をする側面と楽観をする側面を分けている人もいる、と指摘している(Norem, 2002)。

この防衛的悲観主義は多くの研究で、「きっと大丈夫だろうと思つてはいても、最悪の状況を想像する」などの項目によって構成される、尺度によって測定されている(Norem, 2002)。防衛的悲観主義に関する先行研究の多くは、プリテストとして防衛的悲観主義傾向を尺度で測定し、防衛的悲観主義群と戦略的楽観主義群とに分けている(e.g., Norem & Illingworth, 1993)。そしてそれぞれの群の人をさらに、悲観群と熟考回避群とに分けている。このうち悲観群には、「課題の結果が悪い時のことを想像してください」と教示して、試験結果についての悪い可能性を考えさせる。一方熟考回避群には、本来の課題を行わせる前に、その課題とは関係のない別の課題に取り組みさせることで、本来の課題のことを考えるのを妨げる、という操作をしている。このような実験の結果、複数の研究で、防衛的悲観主義傾向の高い人は遂行成績について悲観しておくことが、逆に防衛的悲観主義傾向の低い人は、その課題の遂行結果について考えるのを避けることが、良い遂行結果をもたらす方略であることが示されている(e.g., Norem et al., 1986; Norem et al., 1993)。この防衛的悲観主義研究は日本人の間でも行われており、防衛的悲観主義者の間では結果に関して楽観をしない方が、学業成績が高くなることが明らかになっている(外山・市原, 2008)。

悲観性のメリットに関する研究②悲観への下方シフトに関する研究

達成場面における悲観性のメリットに関する研究の二つ目の流れとして、楽観から悲観へのシフトに関する研究が挙げられる。複数の先行研究で、人が遠い将

来の結果に対しては楽観的な予測をし、近い将来の結果に対しては予測を悲観的な方向にシフトさせる現象が確認されている。たとえば Shepperd, Ouellette, & Fernandez (1996)の研究 1 では、社会人 1 年目に得られるであろう給料の額を、大学 2 年生や 3 年生の方が、大学 4 年生よりも多く見積もっていたことが示された。すなわち、実際に社会人となる日が近い大学 4 年生の方が、より悲観主義にシフトした、ということである。そして続く研究 2 では、試験 1 か月前の得点の予測の方が、試験後や試験が返却される直前の予測よりも有意に高いことが明らかになった。これも、結果がわかる直前に悲観主義にシフトする現象を示した結果と言える。

Carroll, Sweeny, & Shepperd (2006)のレビューではこれらの研究結果を示し、特に達成場面で人々が悲観主義へ移行していく理由について、複数の可能性を挙げている。その中では、「課題直前に悲観しておくことで不安感を利用して達成動機を高める」という防衛的悲観主義的な理由についても言及されていたが、Carroll らのレビューでは主に、悲観性へのシフトに関して、心理的 well-being を防衛するための方略、という見方をしている。そして、この悲観性へのシフトの理由について、課題直前に悲観しておくことで、実際に悪い出来事が起こった時の落胆を防ぐ、という理由や、悲観しておく与实际にはその出来事は起こらないというジンクスをもっているため、という magical thinking の可能性を用いて説明している。Carroll らによると、悲観性へのシフトは、課題を遂行する直前や遂行結果が分かる直前のように、課題の遂行結果を、自身でコントロールをすることができない状況で見られる、とされている。遂行結果をコントロールすることができないため、悲観をして自身の認識を変え、失敗後の落胆、というリスクを軽減しようとするのである。

防衛的悲観主義研究とは異なり、この悲観性へのシフトに関する研究では、楽観性と悲観性が一次元であるのかについての言及はなされていない。しかしながら、試験の数週間前には楽観的であった予測を悲観的な方向に「シフトさせ

る」と論じられていることから、楽観性と悲観性が一次元のものとして扱われていると考えられる。

この悲観性へのシフトに関して、東アジア人を対象に検討した研究は、筆者の知る限り未だに見られていない。類似した研究として、日本人大学生を対象とした Fukuzawa and Yamaguchi (2013)で、自尊心変動性の大きい人が、試験直前に、試験結果に関する楽観性を低く持つ傾向が見られている。自尊心変動性とは、自尊心が状況によって変化する程度のことであり(e.g., Kernis, Cornell, Sun, Berry, & Harlow, 1993)、自尊心変動性が大きい人ほど、自身の自尊心を防衛しようとする動機付けが高いとされている。この Fukuzawa らの結果はすなわち、自己防衛的な人ほど、悲観性へのシフトがより起こっていたことを示唆している。直接悲観性へのシフトを示した研究ではないが、Fukuzawa らの結果は、悲観性のシフトが防衛的な方略である、という Carroll らの指摘を支持するものであるといえる。

悲観性のメリットに関する研究の二つの流れである、防衛的悲観主義と、この悲観性へのシフト研究の大きな違いは、コントロール方略の違いであると考えられる。コントロール方略の中には、自身の意図したように状況を変える一次的コントロール(primary control)と、自身の認識の方を変化させて、自身を外界に合わせる二次的コントロール(secondary control)の二種類が存在する(Weisz, Rothbaum, & Blackburn, 1984)。前述した防衛的悲観主義は、悲観をすることで、悪い結果を避ける方略であると定義されている(e.g., Norem et al., 1986)、このことから、防衛的悲観主義は一次的コントロールに近い性質を持つと考えられる。これに対して悲観性へのシフトとは、一次的コントロールのできない状況で用いられる二次的コントロールである、と Carroll らによって指摘されている(Carroll et al., 2006)。

防衛的悲観主義研究の未検討点

以上で挙げた、悲観性のメリットを示す研究の二つの流れは、「楽観的であれば適応的である」とする従来の主張に対して新たな知見を与える研究であったと考えられる。しかしながら、悲観性のメリットを示す研究の二つの流れでは、いまだに明確な結論が出ていない点が存在する。

防衛的悲観主義研究の未検討点は、防衛的悲観主義方略をとることが、長期的にも適応的であるといえるのかが、示されていない点である。前述したように防衛的悲観主義者が悲観をすることは、起こり得る悪い結果を予測し、それに対してどう対処するのかを考えて高い遂行水準を目指す(Spencer & Norem, 1996)、一次的コントロールであると考えられる。また防衛的悲観主義研究では、防衛的悲観主義者は課題前に悲観をすることで不安感を高く持ち、その不安感を原動力として達成動機を高める、とも指摘されている(Norem, 2001)。具体的には、防衛的悲観主義者は不安感がもともと高いが、課題前に悪い結果になる可能性について熟考することで、逆に成功しなければならないプレッシャーを感じることなく、課題に取り組むことができる可能性が指摘されている(e.g., Norem, 2002)。すなわち防衛的悲観主義者は、課題達成に対する不安感が高いが、その不安感を、起こり得る悪い結果を避けてよい遂行結果を得ようとする達成動機に変えるのだ、とされている。

しかしながら、防衛的悲観主義者が、不安感を原動力として達成動機を高めるという現象は、実証的には示されていない、という指摘もある。たとえば外山(2011)は、防衛的悲観主義者が、自身に適した悲観方略をとっていたとしても、課題直前の不安得点が高いことを示した。そして、課題直前の不安得点とパフォーマンス水準の間には、有意な負の関連が見られたことを示した。そのため、防衛的悲観主義者が、その定義にあるように、課題直前の不安感を利用して達成動機を高め、高いパフォーマンスに導くというメカニズムは、実証的にはまだ確認されていないのである。

更に、防衛的悲観主義者が、不安感を利用して達成動機に結びつけるどころか、その不安感故に達成動機を保つことができない可能性が、複数の研究で指摘されている。たとえば、防衛的悲観主義者が楽観主義者と比べて、「遂行を阻害する要因となる不安感」が高いことが示されている(e.g., Norem, 2001; 外山, 2011)。また、防衛的悲観主義者が、悲観的な方略を用いながらも課題で失敗を経験した場合、その次の課題の遂行成績が悪くなることを指摘する研究もある(荒木, 2012)。すなわち防衛的悲観主義者は、もともと不安感が高く、更に、一度実際に失敗をすると将来の課題への達成動機が低くなってしまうため、実際の遂行成績が悪くなってしまふ、と考えられる。これらを総合すると、防衛的悲観主義者は、一度の課題であれば、心理的 well-being を犠牲にしても達成動機を高く持つことができ、遂行成績が良くなる可能性が高い。しかしながら、一度限りの課題ではなく、将来的にも継続する課題に対しては、心理的 well-being を保つことができず、また失敗に対して敏感である、というデメリットも持つことが言える。そして、短期的には達成場面で適応的な反応に結びつくが、長期的には、達成水準をも脅かす可能性があるといえる。

悲観性へのシフト研究の未検討点

これに対して、悲観性のシフトに関する研究が示しているのが、心理的 well-being を保つための悲観、すなわち、ネガティブな出来事が起こった時の落胆を防ぐためや、「悲観をしたのだから実際にはネガティブな出来事は起こらない」というジンクスのための悲観である(e.g., Carroll et al., 2006)。すなわち、悲観性へのシフトをすることは、周りの状況ではなく自身の認識を変える、という、二次的コントロールである、と Carroll らも指摘している。この点が、実際の遂行結果のコントロールし、すなわち一次的コントロールをしようとする防衛的悲観主義者と異なっている。そのため、悲観性へのシフトをすることには、防衛的

悲観主義的な方略には不足していた、心理的 well-being を保つ機能がある可能性がある。

しかしながら、この悲観性のシフトに関する先行研究では、日々の生活における心理的 well-being を保つ、という機能に関しては言及されているものの、達成動機との関連を示すものは未だにない。そのため、悲観性へのシフトに、達成動機とも関連する機能があるのか、または悲観性へのシフトは一時的に心理的 well-being を防衛するための機能しか持たず、達成場面では適応的な機能を持たないのか、明らかにされていない。唯一、前述した Fukuzawa et al. (2013)の研究において、2日後の試験への悲観性と達成動機の間には有意な関連が見られないことが示されており、自己を防衛するために悲観する人が、達成動機を下げることではない、ということが示唆されているのみである。

以上の未検討点をまとめると、防衛的悲観主義を用いると、達成動機を保てる可能性があるが心理的 well-being が犠牲になるリスクがあり、一方悲観性へのシフトをすれば心理的 well-being を保つことはできるが、達成動機に対しても肯定的な機能を持っているのは未検討である、ということである。そこでこれ以降の研究では、悲観性のメリットに関する二つの流れに関する先行研究を参考に、心理的 well-being を阻害せずに達成動機を保つことができる悲観性について、検討することとする。着目するのは、第一に、悲観をする側面、第二に比較文化的な視点である。

検討課題①悲観をする側面に関する検討

以上のことから、達成場面における悲観性のメリットを指摘する先行研究の中には、防衛的悲観主義のように、心理的 well-being を犠牲にして達成動機を保つ機能のある悲観性と、悲観性へのシフトのように、自身の認識を変えて心理的 well-being を保つ機能のある悲観性が、混在している状況であると考えられる。このことから、どのような悲観性が達成場面で有効に機能するのか、更に、

どのような悲観性であれば、心理的 well-being を保ちつつ達成動機を保つことができるのか、検討が必要であるといえる。そのために本研究では、悲観性に関して、「どのような悲観であるのか」、「何に対する悲観であるのか」を、分類することとする。

防衛的悲観主義や、悲観性へのシフトに関する先行研究ではいずれも、「どのような悲観であれば、達成場面で肯定的な機能を持つのか」という点を明確にし、そのために、複数の側面への悲観性が混在していた可能性がある。たとえば、実験的な手法が多く用いられる防衛的悲観主義研究では、「課題の遂行結果が悪い時のことを想像してください」といった教示で、実験参加者を悲観させる操作が行われている(e.g., Norem et al., 1993)。そして悲観性へのシフトの研究では、「試験で何点獲得できると思いますか」や「あなたの初任給はいくらぐらいになると思いますか」という教示によって、楽観や悲観を測定している(e.g., Shepperd et al., 1996)。しかしながら、これらの教示によって悲観させたり悲観の度合を測定したとしても、人によって「能力が十分ではないためにうまくいかなくなる状況」を想定する人と、「課題のむずかしさや運の悪さによってうまくいかなくなる」状況を想定する人とで、個人差が出てしまうのではないかと考えられる。

そこで本研究では、「どのような悲観性が達成場面で適応的な機能を持つのか」を検討するために、Seligman (1990)の側面の分類を参考にし、悲観性を内的要因への悲観と外的要因への悲観とに分類する。前述したように、帰属理論においては、過去の成績に対して内的な要因、あるいは外的な要因どちらに原因帰属をするのかによって、将来の結果の予測が異なると指摘されている(e.g., Weiner, 1985)。それでは、まだ起こっていない将来の事象への認識にも、この要因の所在による違いは見られるのではないだろうか。

悲観性へのシフトのように、結果がわかる直前になって悲観をする、という現象が起こるのは、課題を行う直前では、結果をコントロールすることができない

ためである、とされている(Carroll et al., 2006)。そして、状況がコントロールできない、と感じる時に悲観をすることは、将来の失敗への落胆を防ぐ、つまりのちの心理的 well-being を保護するものである、ともされている(Carroll et al., 2006)。これに関して、前述した Fukuzawa et al. (2013)でも、直後に行う試験の遂行結果のように、コントロールできない要因に対して悲観をしても、達成動機が害されないということが示唆されている。これらのことを総合すると、自身にはコントロール不可能な、外的要因に対して悲観をしている時には、心理的 well-being は阻害されず、更に達成動機を保つことができる可能性がある。すなわち、悲観性を側面によって 2 種類に分類することで、防衛的悲観主義研究や悲観性へのシフトに関する研究で未検討であった、心理的 well-being を保ちつつ達成動機を保てる悲観性について、検証することにつながるのではないかと考えられる。そこで、今後の研究では、悲観性を内的要因への悲観と外的要因への悲観とに分類し、どの側面への悲観が達成場面で肯定的な機能を持つのかを検討する。

検討課題②比較文化的視点

そして、内的／外的要因への悲観の達成場面における機能には、文化差が見られるのではないかと予測される。先行研究において、東アジア人の方が欧米人よりも、外的要因に対して注意をはらう傾向があることが指摘されているためである(Morris & Peng, 1994)。このことから、達成場面で内的要因に対する悲観をするのか外的要因に対する悲観をするのか、そして、それぞれの側面への悲観が、それぞれ達成場面でどのように機能するのかにも、文化差が見られるのではないかと考えられる。

研究 2 の目的

そこで研究 2 では、研究 1 で扱った二種類の楽観性と達成動機との関連を再検討するのと共に、「何に対する悲観であるのか」という点に着目し、悲観性を 2 種類に分類する。そして、2 種類の悲観性と達成動機との間の関連パターンを、日米で探索的に比較することを目的とする。

さらに本研究では、悲観性と楽観性とを独立した概念として扱う。そのため研究 2 では、研究 1 で扱った二種類の楽観性と、二つの側面に関する悲観性とを独立した変数として扱う。これまでの研究でも、楽観性と悲観性とは一次元上で論じられるべきものではなく独立に扱うべきであるとの指摘がなされてきた。たとえば Norem (2002) は、楽観性と悲観性とが一次元上で扱われている現状を批判し、防衛的悲観主義を、楽観性や安定した特性とは別のものであるとの見方を示している。しかしながらその実、防衛的悲観主義尺度という尺度によって、防衛的悲観主義者と方略的楽観主義者とを一次元上で分類している。すなわち、尺度で測定された防衛的悲観主義得点が一定の数値を超えれば防衛的悲観主義者、一定の数値よりも小さければ方略的楽観主義者と分類しているのである。これらのことから、悲観性と楽観性とを独立の変数として扱った研究は、少ないと言える。そのため研究 2 では、研究 1 で扱った楽観性と、それと独立した変数として二側面の悲観性とを測定する。

研究 2：悲観性の二側面と達成動機との関連についての、探索的検討

目的

本研究では、研究 1 における二種類の楽観性と達成動機との関連について再検討すると共に、2 種類に分類した悲観性と達成動機との関連パターンについて、探索的に日米比較を行う。研究 1 において、日本人の間の方が、達成動機との関連に関して、楽観性の種類による相関パターンの違いがあると指摘されている。また、東アジア人は欧米人よりも悲観的であるため、楽観性よりも悲観性の方が達成動機と強い関連を持つことを指摘する研究もある (e.g., Hosogoshi et al., 2005)。そして、東アジア人の方が欧米人よりも、外的要因に注意をはらいやすいという結果が示されている (Morris et al., 1994)。これらのことから、日本人とアメリカ人の間では、内的要因への悲観、外的要因への悲観それぞれと達成動機との関連パターンに、文化差が見られるのではないかと予測される。

なお、この研究 2 では、研究 1 で測定した「失敗経験を想定した達成動機」とは若干異なり、中立的な状況における達成動機を測定する。研究 1 で、失敗経験後の達成動機を測定したのは、特に LOTR 楽観性と達成動機との関連に関するこれまでの研究では、ストレス状況における努力の持続性など、比較的ネガティブな状況における達成動機が扱われてきたためである (Carver et al., 1998; Solberg Nes, & Segerstrom, 2006)。しかしながら一方で、悲観性に関する研究でこれまで注目されてきた達成動機は、実際に失敗が起きた後、という限定的な状況における達成動機ではなく、課題前などの、結果がまだわからない時に生じる、より中立的で一般的な達成動機である (e.g., Norem et al., 1986)。これらのことから、研究 2 以降では、失敗後と限定せずに、将来に対して努力をしようと思う程度を測定することで、達成動機の測定とする。

方法

調査協力者

東京大学に通う日本人大学生 32 名（男性 20 名・女性 12 名：平均年齢 20.50 歳 $SD=0.95$ ）と、Maryland University のアメリカ人大学生 158 名（男性 44 名・女性 114 名：平均年齢 19.25 $SD=1.24$ ）を対象にした。

手続き

日本人大学生の間では、心理学の授業時間の最後に教室に出向いて質問紙を配布し、30 分程度のアンケート調査への協力を要請した。アメリカ人大学生の間での調査は、REAS というシステムを用いてオンラインで行った。調査協力の要請もオンラインで行い、自分自身に対する考え方についての 30 分程度のオンライン調査に協力してほしい旨を、インフォームドコンセントのオンラインフォーマットに入力し、オンライン上でサインをしてもらった。アメリカ人大学生の間では、調査に協力した学生には単位が与えられた。

測定尺度

内的要因／外的要因への悲観性は、Seligman (1990) の分類方法を参考にして作成した（表 2-1）。各項目の文面は、悪い出来事が起こる可能性について尋ねる Heine et al. (1995) の項目を参考にした。具体的には、「うまくいったり目標達成するための十分な能力がない」といった項目で内的要因への悲観を測定し、「状況が難しく、うまくいかなくなる」といった項目で外的要因への悲観を測定した（福沢, 2014）。測定の際には、「あなたが今後、勉強や仕事という側面において、うまくいったり目標を達成することを阻害するような要因をリストし

てあります。それぞれの状況は、今後、どの程度起こり得ると思いますか」と尋ね、それぞれの項目に関して、「1. まったく起こりえない」から「7. 非常に起こり得る」の7件法で測定した。さらに、研究1と同様の LOTR 尺度を用いて、LOTR 楽観性（全般的楽観性）を測定した。そして、領域固有の楽観性に関しては、「勉強・学業という学問という側面に関して、あなたはどの程度、楽観的または悲観的ですか」と尋ね、「1. 非常に悲観的である」～「7. 非常に楽観的である」の7件法で測定した。達成動機は、Fukuzawa et al. (2013)を参考に、「勉強・学問という側面に関して、あなたは今後、どの程度努力しようと思いますか」と尋ね、「1. 全くそう思わない」～「7. 非常にそう思う」の7件法で測定した。アメリカ人大学生の間での調査は、すべて英文の項目を用いて行われた。英訳の際にはバイリンガルの大学院生3名の間で、committee approach (Brislin, 1980)を用いて項目の確認を行った。本研究の分析に使用した項目を、巻末の付録2に記載した。

結果

まず、7項目の内的／外的悲観尺度に関して因子分析（プロマックス回転）を行ったところ、日本人大学生の間では2因子に分類された（表2-1）。因子間の相関係数は、 $r = -.40$ であった。そして、「能力」「モチベーション」「エネルギー」「努力」の4項目を「内的要因への悲観因子」、「課題の難しさ」「運」「偶然」という3項目を「外的要因への悲観因子」と命名した。アメリカ人大学生の間では、「能力」「モチベーション」「エネルギー」「努力」が第一因子、「運」「偶然」が第二因子に含まれている、という構造は日本人と同様であったが、日本人の因子構造とは異なり、項目5の「課題の難しさ」も、第一因子に含まれていた。しかし、「外的要因への悲観」と命名した第二因子との意味的整合性と、日本データにおける因子構造との整合性を考え、アメリカ人の間では項目

5は入れずに加算した。この時の因子間の相関係数は、 $r = .47$ であった。なお、アメリカ人の間で項目5を第一因子に含んだ場合と第二因子に含んだ場合とで、結果のパターンに違いは見られなかった。

次に、表2-2に日本人大学生の間で、表2-3にはアメリカ人大学生の間での、それぞれの変数の記述統計と、変数間の相関係数を示した。なお、内的要因への悲観得点と、外的要因への悲観得点はいずれも、項目を加算後、項目数で割った平均値である。

表2-2より、日本人の間では、LOTR楽観性は他のどの変数との間にも、有意な相関が見られなかったことが分かる。これは、達成動機とLOTR楽観性との間に有意な関連が見られなかった、研究1の結果と同様であった。そして、領域固有の楽観性は、学業全般に関する内的要因への悲観との間に、有意な負の相関が見られた。外的要因への悲観との間には、逆に正の相関が見られていた。さらに日本人の間では、外的要因への悲観と達成動機との間には、有意な正の相関が見られた。

表2-3より、アメリカ人の間では、LOTR楽観性も領域固有の楽観性も、同様に内的要因への悲観、外的要因への悲観それぞれとの間に負の相関があることが分かる。また、内的要因への悲観、外的要因への悲観はどちらも、達成動機との間に負の相関が見られた。

表 2-1. 日本人の間での、内的／外的悲観尺度の因子分析の結果

	I	II
1 内的要因への悲観($\alpha = .85$)		
うまくいったり目標達成するための十分な努力ができない	.96	-.08
うまくいったり目標達成するための十分な能力がない	.90	.05
うまくいったり目標達成するための十分なモチベーションがない	.76	.06
うまくいったり目標達成するための十分なエネルギーがない	.40	.05
2 外的要因への悲観($\alpha = .82$)		
偶然の要因によって、うまくいかなくなる	-.03	.99
運の悪さによって、うまくいかなくなる	.02	.86
状況が難しく、うまくいかなくなる	.10	.58
因子寄与率(%)	43.67	20.21
累積率(%)	43.67	63.88

表 2-2. 日本人の間での相関関係の表

	1	2	3	4	5	M	SD
1. LOTR楽観性	1					17.87	4.76
2. 「学業・仕事」への楽観性	.26	1				4.06	1.70
3. 内的要因への悲観	.02	-.66 **	1			4.48	1.54
4. 外的要因への悲観	.10	.39 *	-.34 †	1		4.33	1.30
5. 達成動機	.09	.27	-.18	.42 *	1	5.78	1.10

* $p < .05$, ** $p < .01$, † $p < .10$

表 2-3. アメリカ人の間での相関関係の表

	1	2	3	4	5	<i>M</i>	<i>SD</i>
1. LOTR楽観性	1					21.73	4.62
2. 「学業・仕事」への楽観性	.30 **	1				5.38	1.24
3. 内的要因への悲観	-.35 **	-.38 **	1			2.73	1.41
4. 外的要因への悲観	-.24 **	-.25 **	.44 **	1		2.53	1.46
5. 達成動機	.12	.38 **	-.24 **	-.19 *	1	6.21	1.07

* $p < .05$, ** $p < .01$, † $p < .10$

考察

本研究では、日本人大学生とアメリカ人大学生との間で、研究1の再検討をし、また、2種類の悲観性と達成動機との関連について探索的に検討することを目的とした。

研究1の再検討①LOTR楽観性の相関パターンの文化差について

まず日本人の間では研究1と同様、LOTR楽観性と領域固有の楽観性とで、他変数との関連パターンが異なっていた。日本人の間で、LOTR楽観性は他のどの変数との間にも有意な関連は見られなかったのに対して、領域固有の楽観性は、内的要因への悲観、外的要因への悲観との間に、それぞれ有意な負の相関、正の相関をもっていた。このことから、研究1と同様、日本人の間では、LOTR楽観性は達成場面における他の変数との間に関連を持っていなかったことが示された。

一方でアメリカ人の間では、LOTR楽観性も領域固有の楽観性も、内的要因への悲観、外的要因への悲観両方との間に、同様に負の相関が見られた。このこと

から、アメリカ人の間ではどちらの楽観性も、他の変数との間にほぼ同様の相関関係を持っていたといえる。これらのことから、日本人の間では、LOTR 楽観性と領域固有の楽観性とで他変数との関連パターンが異なるが、アメリカ人の間ではほぼ同様である、ということが言え、これは研究1と一貫した傾向であったといえる。

ただし、研究2においてはアメリカ人の間でも、LOTR 楽観性は達成動機との間に有意な関連を持たず、これは研究1における、イタリア人の中での結果と整合しない結果であった。しかしながら、前述したように、欧米人の中でも、LOTR 楽観性の達成場面における機能については、先行研究で一貫していない(e.g., Solberg et al., 2009; Chang et al., 2011)。これらのことから、欧米人であっても日本人であっても、LOTR 楽観性は領域固有の楽観性と比べて、達成場面での機能は限定的である、と考えられる。

研究1の再検討②領域固有の楽観性と内的要因への悲観との間の関連

本研究で、日本人の間では、内的要因への悲観は領域固有の楽観性との間に負の相関 ($r = -.66$)が見られた。このことから、研究1で、日本人の間で唯一達成動機との間に正の関連を持っていた領域固有の楽観性とは、能力やエネルギーといった、内的な要因と関係するものであった、と考えられる。その一方で LOTR 楽観性は、日本人の間では、達成場面における内的要因への悲観との間にも、外的要因への悲観との間にも、有意な相関が見られなかった。このことから、LOTR 楽観性は、領域固有の楽観性とは異なり内的な要因に関係するものではなく、そのために、達成動機や達成に関するほかの変数と、有意な関連を持っていなかったのではないかと考えられる。

これらのことから、楽観性と達成動機との関連についての文化的普遍性に関して、次のようなことが言える。日本人の間でも、達成動機を維持するために楽観性は必要であるが、それは楽観性の中でも領域固有の楽観性のような、内的な要

因に関係するもののみである、ということであると考えられる。前述したように、日本における楽観性にも、心理的 well-being と結びつく、など、ある程度の機能的等価性が認められている (e.g., 石毛ら, 2005)。これは達成場面においても、ある程度同様であると言える。この研究 1、研究 2 において、日本人の間であっても、内的要因と関連する楽観性であれば、達成場面で肯定的な機能を持つことが示唆された。

内的／外的要因への悲観と達成動機に関する文化差

本研究第二の目的は、内的要因への悲観、外的要因への悲観と達成動機との関連について、日米で探索的に検討することであった。まず本研究では、日本人大学生の間でもアメリカ人大学生の間でも、内的要因への悲観と達成動機の間にも負の相関がある、という結果は共通して見られた。

一方で、研究 2 の結果において特筆すべきは、外的要因への悲観と、他の変数との間の相関パターン、顕著な文化差である。日本人の間では、外的要因への悲観は領域固有の楽観性との間に正の関連を持ち、また達成動機との間にも正の関連を持っていた。これに対してアメリカ人の間では、外的要因への悲観の他の変数との相関パターンは、内的要因への悲観の相関パターンと変わらず、領域固有の楽観性とも、達成動機とも負の相関を持っていた。すなわち、アメリカ人の間では、内的なものでも外的なものでも悲観をしないことが、領域固有の楽観性や達成動機と結びつくのに対して、日本人の間では、外的要因への悲観は、むしろ高く持っていた方が達成場面では肯定的な機能を持つ、という可能性がある。

そこで追加分析として、日本人の間で、外的要因への悲観と領域固有の楽観性を独立変数、達成動機を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、日本人の間では、外的要因への悲観と達成動機との正の関連は見られたものの ($\beta = .37, p < .05$)、領域固有の楽観性と達成動機との有意な関連は見られなかった ($\beta = .12, n.s.$)。すなわち日本人の間では、外的要因への悲観の方が、領域固有

の楽観性よりも、達成動機に対して強い予測力を持っている、ということが考えられる。このことから、研究1で二種類の楽観性と達成動機との間の関連パターンに違いが見られた理由が説明できると考えられる。すなわち、先行研究で指摘されているように(e.g., Hosogoshi et al., 2005)、東アジア人の間では、楽観性よりも悲観性の方が、達成場面で肯定的に機能する可能性が示唆された。

これらのことから、アメリカ人大学生の間では、どの側面に関する悲観であるのかによって、達成動機との関連パターンが異なるのに対して、日本人の間では、内的なものであるのか外的なものであるのかによって、達成動機との関連パターンが大きく異なるということがいえる。実際、日本人の間では、内的要因への悲観と外的要因への悲観とが負の相関を持っていたのに対して、アメリカ人の間では逆に、中程度の正の相関が見られた。このことから、日本人の間では、内的要因への悲観と外的要因への悲観との間の性質的な違いがアメリカ人よりも大きく、達成動機に影響を及ぼすのは、悲観性の中でも特に、外的要因への悲観であるということが明らかになった。

研究1と研究2を総合して、日本人大学生の間では、どの側面にでも楽観をすることが達成動機に結びつくわけではなく、またどの側面であっても悲観をすることが達成動機を下げるというわけではない、と言える。そして、運や偶然など外的な要因に関する悲観は、日本人の間では達成動機を維持するのに有益な悲観であり、その悲観性の機能はアメリカ人の間では見られない、ということが言える。そして日本人の間では、外的要因への悲観は、研究1において達成動機と正の関連を持っていた領域固有の楽観性よりも、より強い予測力を持っていた。これらのことから、今後の研究では、内的／外的要因への悲観と達成動機との関連について、より詳細な検討が必要であると考えられる。そこで、続く研究3では、特に日本人の間で、より大きなサンプルを対象とした調査により、この研究2における結果が再現されるか否かを検討する。更に、2種類の悲観性がどのようにして達成動機に結びつくのか、そのプロセスについてのより詳細な検討を行

う。具体的には、古くからの研究で指摘されている達成動機の規定因のひとつであり、また本研究における 2 種類の悲観性とも密接に関係すると考えられる、コントロール感をモデルに加える。

第一部のまとめ

第一部では、楽観性、悲観性それぞれと達成動機との関連パターンに文化差があるのか否かを検討するため、日本、イタリア、アメリカで、比較文化的検討を行った。研究1では、過去の研究で扱われてきた二種類の楽観性（LOTR 楽観性・領域固有の楽観性）と達成動機の関連を調べた。その結果、日本人の間でのみ、達成動機と有意な関連を持つ楽観性と、持たない楽観性とが見られた。このことから、日本人をはじめとする東アジア人は、どのような楽観であっても達成動機が保てるわけではなく、達成場面における楽観性の機能的等価性は疑わしいと考えられた。

そして、東アジア人は欧米人と比べて悲観的であるために、楽観性よりも悲観性の方が、達成動機と関連するのではないかと考えられた。そのため、研究2では、悲観性も変数に加えた日米比較調査を行った。達成場面における悲観性のメリットに関する研究では、「どの側面に対して悲観をするのか」の言及がはっきりなされていない、という未検討点があることから、悲観性を二種類に分類した。さらに、悲観性と達成動機の関連には、比較文化的視点が不足していると考えられたことから、研究2では内的／外的要因への悲観と達成動機との関連を日米で比較した。その結果、日本人の間でのみ、内的要因への悲観と外的要因への悲観とが、達成動機との間に異なる関連パターンを持っていた。そして、日本人の間では、外的要因への悲観が達成動機と正の関連を持っており、その予測量は楽観性よりも高いということが示された。続く研究3、研究4では、主に日本人大学生を対象にし、二種類の悲観性がどのようにして達成動機と結びつくのか、モデルを完成させることを目的とする。

第二部：悲観性と達成動機の関連のモデルに関する研究

第二部ではまず、日本人大学生を対象にし、二種類の悲観性と達成動機との関連に関するモデルについて、詳細な検討を行うことを目的とする（研究3、研究4）。そしてその後、アメリカ人大学生の間での追加調査の結果を示し、達成動機のモデルに関して比較文化的検討を行う（研究5-1、研究5-2）。

研究3：日本人の間での、内的／外的要因への悲観・コントロール感と達成動機との関連についてのモデル

目的

研究1、研究2では、日本人の間でと欧米人の間では、達成動機と楽観性／悲観性との関連パターンが、異なることが明らかになった。特に日本人の間では、悲観性の種類によって、達成動機との間の関連パターンが大きく異なり、その予測力が楽観性よりも大きいことが分かった。研究3以降では、なぜこのような関連パターンの文化差が見られたのかを明らかにするために、悲観性がどのようにして達成動機に結びつくのか、そのプロセスについての詳細な検討を行う。

具体的には、研究3では、悲観性と達成動機との関連を媒介する変数として、コントロール感に着目する。コントロール感(perceived control)とは、自身の目標や願望に合うように、身体的、社会的、行動的な現実を作り上げることができる、という認識のことであり(Weisz, et al., 1984)、これが高いと達成場面における努力量や実際の遂行成績が高いとされている(e.g., Schmitz & Skinner, 1993)。本研究でコントロール感に着目したのは、コントロール感は、古典的な

期待価値モデルにおいても、悲観性のメリットに関する二つの流れの中でも、共通して言及されている変数であるためである。

古典的な期待価値モデルを修正した、Eccles らの現代的期待価値理論では、コントロールの所在は、楽観性と同様に、達成動機の規定因であるとされている (Eccles & Wigfield, 2002)。すなわち、将来の遂行成績に対して楽観をしており、更に将来の遂行成績をコントロール可能である、と考えている人ほど、達成動機を高く保つことができる、といえる。

そして、悲観性のメリットに関する先行研究においても、コントロール感は重要なキーワードであるといえる。たとえば防衛的悲観主義研究では、悲観をする理由の1つとして、将来起こり得るネガティブな結果を防ぐため、という理由が挙げられている(e.g., Norem et al., 1993; Spencer et al., 1996)。悲観をすることにより、ネガティブな結果を防ぐ、すなわち「コントロール」をする、というのが、防衛的悲観の目的であるといえる。日本人を対象にした研究においても、川森・古川(2004)による実験では、防衛的悲観主義者が、自身に最も適した悲観方略を用いる際、楽観方略を用いる時よりもコントロール感が高かったという結果が見られ、防衛的悲観主義が、コントロール感を持ちつつ努力をする認知方略である、と考察されている。さらに、村田・菊島(2009)の研究でも、防衛的悲観主義者の持つ課題に対するコントロール感が、方略的楽観主義者や本心から悲観的である悲観主義者と比べて有意に高いことを示している。

一方で、悲観性のシフトに関する研究でも、コントロール感に言及されている。課題直前に悲観をするのは、その課題の結果の予測が容易であり、課題に対するコントロール感が低いためである、とされている(Carroll et al., 2006)。すなわち、たとえば試験の直前などに、失敗をするという予測ができる時、さらに、その時点から努力をしたとしても結果を変えられない時に、悲観性のシフトが行われるとされている。つまり、この悲観性のシフトは、課題に対してコントロール感が低い時に、見られる現象であると言えるのである。

これらのことを総合すると、悲観性のメリットに関する先行研究の二つの流れでは、コントロール感に関してまったく逆のことが指摘されている、と言える。防衛的悲観主義研究における指摘どおり、悲観をすることで悪い結果を防ごうとするのならば、悲観性はコントロール感に正に結びつくはずである。一方で悲観性のシフト研究における悲観性とは、「状況がコントロールできない」状況で見られる悲観性であり、悲観性のシフトをする人はコントロール感が低い、といえる。

研究2における結果では、外的要因への悲観が、達成動機と正に結びついていた。外的要因への悲観は、課題の難しさや運など、個人ではコントロール不可能な要因に対する悲観である。そのため、この外的要因への悲観が高い人は、コントロール感が低い可能性がある。そして、研究2において、外的要因への悲観と達成動機とが正の相関を持っていたことから、外的要因に対して悲観をする人は、仮にコントロール感が低かったとしても、達成動機を保てるのではないかと考えられる。このことから、外的要因への悲観は、一般的に達成動機に必要とされてきたコントロール感に関わりなく、達成動機に結びつくのではないかと考えられる。達成動機に関する従来の研究では、コントロール感が高い方が、達成動機が高くなる、とされてきた。本研究において、コントロール感に関わらず、達成動機を維持することができるパスが見られれば、達成場面におけるコントロール感に関する研究としても、新たな知見であると考えられる。

更に、このコントロール感に関しても、東アジア人と欧米人との間で文化差が指摘されている。前述したように、コントロールには、自身の意図したように状況を変える一次的コントロールと、自己の認識の方を変化させて、自身を外界に合わせる二次的コントロールの二種類が存在する(Weisz et al., 1984)。本研究を含め、過去のさまざまな研究で測定されている「コントロール感」とは、このうち一次的コントロールである、といえる。そしてこの Weisz らの研究(1984)において、東アジア人の間では欧米人に比べて、二次的コントロールの方が一次的

コントロールよりも多く行われている、と指摘されている。そのため、日本人にとっては、達成場面で一次的コントロールを使わないことが、非適応的ではない可能性がある。このことから、研究 2 で達成動機と正の関連が見られた外的要因への悲観は、日本人の間では、コントロール感を通らずに達成動機に結びつく変数なのではないか、と予測される。

一方で、研究 2 で、日本人の間での内的要因への悲観は、アメリカ人大学生の間での内的要因への悲観と同様、領域固有の楽観性と負の結びつきを持つ悲観であることが分かった。さらに、日本人の間での内的要因への悲観は、アメリカ人の間と変わらず、達成動機との間に負の関連を持っていた（研究 2）。このことから、内的要因への悲観は、先行研究における領域固有の楽観性と同様に、コントロール感と関連する悲観であると考えられる。すなわち、内的要因への悲観を持たないことが、コントロール感に結びつくと考えられ、内的要因への悲観はコントロール感に負の結びつきを持ち、そしてそのコントロール感が達成動機と正の関連を持つのではないかと考えられる。つまり日本人の間では、外的要因への悲観はコントロール感を経由せずに達成動機と結びつくが、内的要因への悲観はコントロール感を経由して、達成動機に結びつくのではないかと予測されるのである。

これらのことから、日本人大学生を対象とした研究 3 では、

仮説 1：外的要因への悲観は、コントロール感に関わりなく、直接達成動機に結びつくだろう

仮説 2：内的要因への悲観は、コントロール感と負の関連を持つだろう

仮説 3：コントロール感は、達成動機と正の関連を持つだろう

という 3 つの仮説に関して検証する。

方法

調査協力者

関西大学の大学生 166 名（男性 93 名・女性 72 名・不明 1 名）を対象とした。平均年齢は 20.33 歳（SD = 1.22）であった。

調査項目

内的要因への悲観、外的要因への悲観は、研究 2 と同様の 7 項目（表 3-1）に関して、7 件法で測定した。達成動機も、研究 2 と同様の項目で、7 件法を用いて測定した。コントロール感は、「“学業や仕事での成績”という側面に対するあなたの将来は、あなた自身の手で、どの程度コントロール可能だ（変えることができる）と思いますか。」と尋ね、「1. まったくコントロールできない」～「7. 非常にコントロールできる」の尺度で 7 件法で測定した。本研究の分析で扱ったすべての項目を、巻末の付録 3 に記載した。

調査手続き

授業時間の最後の教室に出向いて調査票を配布し、30 分程度の質問紙調査に協力を要請した。

結果

まず、研究 2 と同様に、内的要因への悲観と外的要因への悲観 7 項目に対して、プロマックス回転で探索的因子分析を行った。その結果、研究 2 と同様の 2 因子が抽出され、研究 2 と同様に内的要因への悲観、外的要因への悲観と命名し

た（表 3-1）。因子間相関は、 $r = .38$ であった。表 3-2 に、各変数の記述統計量と、変数間の相関係数をまとめた。相関分析の結果、仮説 2 で予測したとおり、内的要因への悲観はコントロール感との間に負の関連を持ち、仮説 3 で予測したとおり、コントロール感は達成動機との間に正の関連を持っていた。

次に、達成動機を従属変数とした重回帰分析を行った（表 3-3）。その結果、研究 2 における日本人の結果と同様、また仮説 1 と仮説 2 で予測したとおりに、内的要因への悲観は達成動機と負の関連を持ち、外的要因への悲観は達成動機と正の関連を持っていた。そしてこれらとは独立に、仮説 3 の予測どおり、コントロール感も達成動機との間に正の関連を持っていた。

最後に、これらの変数がどのようにして達成動機に結びつくのかを検討するため、達成動機を従属変数としたモデルを作り、パス解析を行った。図 1 が、適合度が最大となったモデルである。適合度指標は、 $GFI = 0.99$, $AGFI = 0.92$, $RMSEA = 0.10$ であった。パス図より、内的要因への悲観は直接達成動機との間に負の関連を持つがコントロール感との間にも負の関連を持ち、コントロール感が達成動機と正の関連を持つことが分かった。つまり内的要因への悲観は直接的にも達成動機と負の関連を持つが、コントロール感を経て達成動機へと結びつくパスももっていた。一方で、外的要因への悲観はコントロール感との間に有意な関連を持たず、直接達成動機との間に正の関連を持つことが明らかになった。

表 3-1. 内的要因への悲観・外的要因への悲観測定尺度に対する因子分析の結果

	I	II
1 内的要因への悲観 ($\alpha = .85$)		
うまくいったり目標達成するための十分なモチベーションがない	.90	-.08
うまくいったり目標達成するための十分なエネルギーがない	.86	-.02
うまくいったり目標達成するための十分な努力ができない	.74	-.12
うまくいったり目標達成するための十分な能力がない	.62	.18
2 外的要因への悲観 ($\alpha = .75$)		
偶然の要因によって、うまくいかなくなる	-.02	.87
運の悪さによって、うまくいかなくなる	-.13	.77
状況が難しく、うまくいかなくなる	.38	.46
因子寄与率(%)	43.38	17.13
累積率(%)	43.38	60.51

表 3-2. 変数間の記述統計量と、相関関係

	1	2	3	4	<i>M</i>	<i>SD</i>
1. 内的要因への悲観	1				4.55	1.27
2. 外的要因への悲観	.37 **	1			4.35	1.19
3. コントロール感	-.23 **	-.20 *	1		4.96	1.44
4. 達成動機	-.18 *	.11	.18 *	1	5.47	0.99

* $p < .05$, ** $p < .01$, † $p < .10$

表 3-3. 達成動機を従属変数とした重回帰分析の結果

従属変数: 達成動機	β
内的要因への悲観	-.22 **
外的要因への悲観	.23 **
コントロール感	.19 *
<i>R</i>	.32
<i>R</i> ²	.10 **
Adjusted <i>R</i> ²	.08

* $p < .05$, ** $p < .01$, † $p < .10$

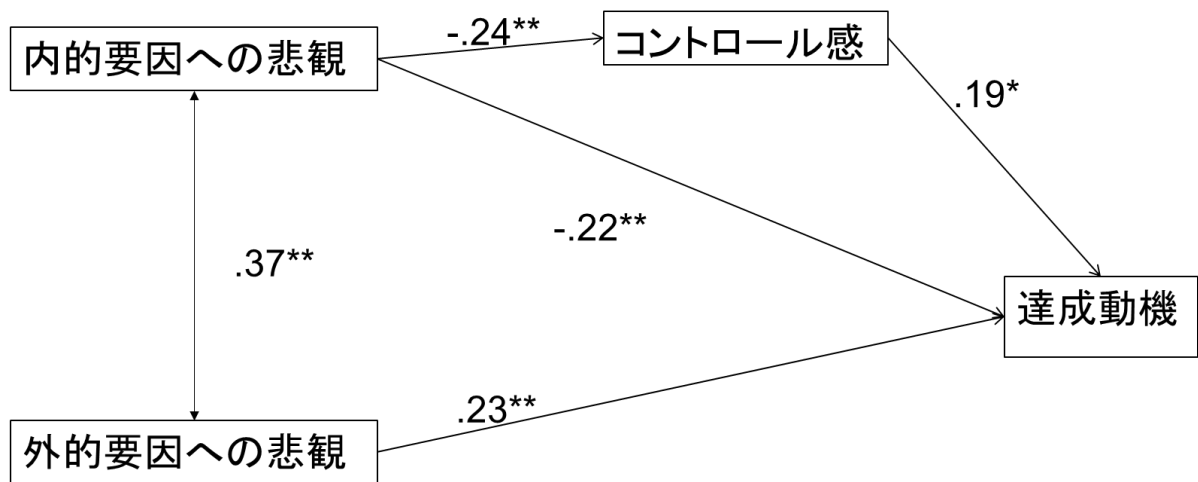


図 3-1. 二種類の悲観性、コントロール感、達成動機との関連に関するパス解析の結果

考察

この研究 3 では、研究 2 で見られた外的要因への悲観と達成動機との間の正の関連が、より大きなサンプルを対象としても再現されるかどうかを調べることと、「コントロール感」という、これまでの楽観性や悲観性と達成動機との関連に関する研究で重要な変数とされてきた変数をモデルに加えることで、二種類の悲観性が達成動機と結びつくプロセスについて詳細に検討することを目的とした。

重回帰分析の結果、内的要因への悲観は達成動機と負の関連を持ち、外的要因への悲観とコントロール感も、それぞれ独立して、達成動機との間に正の関連を持つことが分かった。また、パス解析の結果、外的要因への悲観は、コントロール感との間には有意な関連を持たず、達成動機との間にのみ、直接正の関連を持つことが分かった。一方で、内的要因への悲観は、達成動機とも直接負の関連を

持つが、コントロール感とも負の関連を持ち、コントロール感は達成動機との間に正の関連を持っていた。

これらの結果から、コントロール感に関わりなく、外的要因への悲観と達成動機とが正の結びつきを持つことを予測した仮説 1 は支持された。また、内的要因への悲観とコントロール感との間の負の関連を予測した仮説 2 と、コントロール感と達成動機との正の関連を予測した仮説 3 も支持された。

本研究の結果、内的要因への悲観は、符号の方向は逆であるが、従来の研究で示されてきた、学業という領域固有の楽観性と、同様の性質を持つということが言える。実際研究 2 でも、学業への楽観性と内的要因への悲観の間には、 $r = -.60$ 以上という負の相関が見られている。これらのことを総合して、能力などといった内的要因に対する悲観を低くもっているほど、達成動機を高く持つことができる、ということが考えられる。そして、コントロール感が媒介変数として機能するというのも、従来の期待価値理論をはじめとする研究で示されているとおりである。すなわち、自身の能力に対して悲観をしていないことが、その課題の結果をコントロールできるだろう、というコントロール感に結びつき、達成動機へと結びつくのである。研究 1 ～研究 3 までの結果を総合して、日本人の間でも、欧米人の間と同様に、悲観をしない方が良い側面があることが明らかになった。そしてそれは、能力などの内的な要因に関するものであることが明らかになった。

一方で、外的要因への悲観は、コントロール感を經由せずに、直接達成動機へと正に結びついていた。このことから、日本人にとって外的要因への悲観は、コントロール感とは関連のない、達成動機の規定因のひとつであると言える。先行研究において、日本人のコントロール感は欧米人のそれよりも低く、一次的コントロールよりも二次的コントロールを多く使用する、ということが指摘されている(Weisz et al., 1984)。本研究で扱われているコントロール感が、成績を自身の手で変えようとする一次的コントロール感であるということを考慮すると、その

コントロール感と関連のない外的要因への悲観は、自身の認識を変える、二次的コントロールと類似したものであることが考えられる。前述したように先行研究では、一次的コントロールは達成場面で肯定的機能を持つとされている(e.g., Schmitz et al., 1993)。一方で、二次的コントロールに関しては、悲観性へのシフトなどのように、心理的 well-being を保つ目的では使用されるとされてきたが、達成場面におけるメリットについては、これまで指摘されてこなかった。そのため本研究における、外的要因への悲観がコントロール感を經由せずに達成動機に結びついた、という結果は、一次的コントロール以外のコントロールの、達成場面における肯定的機能という、従来の研究では見られなかった知見を示すものである、と言える。

なお、研究 2 とは異なり研究 3 では、外的要因への悲観と達成動機との間には、直接の正の単純相関関係が見られなかった。そして研究 2 とは異なり、内的要因への悲観と外的要因への悲観との間の相関関係が負の相関ではなく、正の相関であった。これは、研究 2 の対象者の間でよりも、研究 3 の対象者の方が、内的要因への悲観と外的要因への悲観との間に重なる部分が多かったということである。そして、その重なる部分を統制することで、外的要因への悲観が独立に達成動機に結びついていることが分かった。

対象者による結果の違いは、今後複数のサンプルを対象に調査を行い検討していく必要がある。しかしながら、この研究 3 では、二種類の悲観性が、互いの影響を統制した結果、独立した関連を達成動機との間に持っていた。内的要因への悲観と外的要因への悲観とで共通する部分とは、内的な要因であっても外的な要因であっても、側面に関わらず悲観をする性質、すなわち、個人が性質としてもっている悲観性の部分と考えられる。そのため今後は、内的要因への悲観、外的要因への悲観それぞれ特有の部分が、どのようにして達成動機に結びつくのか、さらなる検討が必要である。

この研究 3 で、内的要因への悲観は、コントロール感と正の関連を持ち、達成動機に結びつくことが明らかになった。しかし、本研究において外的要因への悲観が有意な結びつきを持たなかった「コントロール感」は、達成場面で重要とされる変数である(e.g., Weisz et al., 1984)。そのため、外的要因への悲観が、本当に日本人にとって達成場面で適応的な機能を持つと言えるのかを、今後は再検討する必要がある。そこで研究 4 では、課題を行う前の方略を変数に入れ、二種類の悲観性と達成動機との関連に関するモデルを完成させることを目的とする。

研究4：日本人の間での、内的／外的要因への悲観・コントロール感・方略と達成動機との関連についてのモデル

目的

この研究4では、日本人大学生を対象とし、研究3で見られた二種類の悲観性と達成動機との関連に関するパスモデルを完成させることを目的とした。研究2では、日本人大学生の間で、内的要因への悲観は達成動機と負の関連を持つものの、外的要因への悲観は、逆に正の関連を持つことが明らかになった。この傾向は、重回帰分析の結果、つまり内的要因への悲観と外的要因への悲観とで共通する部分を統制した結果、研究3でも見られた。

これらのことから、日本人の間では外的要因への悲観は、達成場面で適応的な機能を持つことが示唆される。しかし研究3で、外的要因への悲観は、達成場面で重要な機能であるとされる、コントロール感と有意な関連を持たなかった。そのため、外的要因への悲観が本当に達成場面で適応的な機能を持つのであれば、外的要因への悲観は、コントロール感とは関連のない、別の適応的な変数と結びつくと予測される。そこでこの研究4では、内的／外的要因への悲観と達成場面における適応的な方略との関連について検討する。

ここで、達成場面における方略との関連を検討するのは、悲観性と達成動機との関連に関する先行研究においても、悲観性は方略として扱われているためである。防衛的悲観主義の研究においては、初期の研究から、本心から悲観的である人と、課題前の方略として悲観性を使う防衛的悲観主義者とを分類している(e.g., Norem et al., 1993)。日本の研究においても、防衛的悲観主義者が方略的楽観主義者と比べて、テスト対処方略の下位概念のうち、「回避的思考方略」と「楽観的思考方略」が有意に低いことが示されている(外山・市原, 2008)。そ

して、試験に向けて、「計画を立ててそれに従う」といった「積極的方略」をそれまでに使ってきた度合いが、防衛的悲観主義者と方略的楽観主義者とで異なることをも示されている（外山, 2005; 外山ら, 2008）。また悲観性へのシフト研究に関しても、悲観性が、失敗後の落胆を防ぐための方略であるということが示唆されている（Carroll et al., 2006）。

研究 3 までの段階では、内的要因への悲観、外的要因への悲観が、真の悲観性であるのか、または達成場面で適応するための方略であるのかははっきり分かっていなかった。しかし、上記で示したように、従来の悲観性のメリットを示す研究においても、悲観性は性質としての悲観主義とは切り離されて考えられてきている。そのため、内的要因への悲観と外的要因への悲観もまた、日本人の間では適応的な方略と結びつくのではないかと予測される。そこで研究 4 では、研究 3 のモデルに「方略」を加えることで、内的要因への悲観、外的要因への悲観が方略であるのか、真の悲観性であるのかを検証する。

先行研究で扱われてきた達成場面での方略のうち、問題焦点方略(*problem focused coping*)や、「試験勉強を工夫する」などの積極的方略は、達成場面において肯定的な機能を持つことが、先行研究で指摘されている。たとえば、試験における積極的方略が試験の遂行成績にも、正の結びつきを持つことが知られている（外山, 2005）。さらに、これまでに行ってきたテスト方略が、未来の達成動機を予測することを示す研究もある（神藤, 1998; Thompson & Gaudreau, 2008）。そのため、問題を回避せずに注目する問題焦点方略や積極的方略をそれまでに扱ってきた度合いが、これからの達成動機と正の関連を持つと考えられる。

研究 2、研究 3 において、内的要因への悲観の持つ関連パターンは、日本人の間でも欧米人の間でも変わらず、内的要因への悲観をしないことが適応的であると考えられる。すなわち、内的要因への悲観を低く持つことが、達成場面における適応的な方略であると考えられる。このことから、内的要因への悲観は、適応的な方略とは、負の関連を持つと予測される。

一方で、外的要因への悲観に関しては、日本人とアメリカ人とでは、逆の関連が見られると予測される。前述したように、コントロール感には、外界を変化させる一次的コントロールと、状況ではなくて自分の認識を変化させる二次的コントロールとがあることが指摘されている(Weisz et al., 1984)。研究 2 において、日本人の間でのみ、外的要因への悲観は達成動機と正の結びつきを持っていた。そして研究 3 において、外的要因への悲観が、一次的コントロールを目的としたものというよりは、自身の認識を変化させることで心理的 well-being を保とうとする、二次的コントロールに近いことが考えられた。そして、日本人の間では、外的要因への悲観のような二次的コントロールに近い変数が、達成場面で有効に機能することが示唆された。外的要因への悲観が、心理的 well-being を保ちつつ、達成動機に結びつく方略であるならば、外的要因への悲観は、達成場面における適応的な方略と正の関連を持ち、それが達成動機へと結びつくはずである。そして、外的要因への悲観が適応的な方略と結びつくことが言えれば、これまで示されてこなかった、達成場面における二次的コントロールの適応的機能について新たな知見を提示できる、と考えられる。

総合すると、研究 4 では、日本人大学生を対象とし、2 種類の悲観性から達成動機に向かうモデルを完成させることを目的とする。具体的には、外的要因への悲観と達成動機を媒介する変数とは何なのかを、達成場面での方略を変数に加え、モデルを完成させる。悲観性に関する過去の研究で、悲観性とは本心からの悲観性ではなく、方略であるとされている。それならば、外的要因への悲観はコントロール感とは結びつかないが、達成場面における適応的な方略とは結びつくのではないかと考えられる。

方略を測定する尺度について

先行研究において、達成場面における適応的な方略とは、問題に直面するのを回避することなく、どのようにして問題解決をするのか、工夫することであると

されている。このような方略は、先行研究では問題焦点型コーピング (Lazarus & Folkman, 1984) や、テスト対処方略の中の「積極的方略」 (外山, 2005) と呼ばれている。そして達成場面においては、問題焦点型コーピングと積極的方略が、適応的な機能を持つことが指摘されている。たとえば、問題焦点型コーピングが実際の遂行成績との間に正の関連を持つことや (Cohen, et al., 2008)、達成動機との間に正の関連を持つことが示されている (Doron, Stephan, Maiano, & Le Scanff, 2011)。テスト対処方略尺度を用いた外山(2005)では、積極的方略と達成動機との関連を直接示してはいない。しかし、外山(2005)のテスト対処方略尺度がコーピング尺度等を参考に作成されたものであることや、項目の類似点を考慮すると、積極的方略は問題焦点型コーピングと同様の機能を持ち、達成動機と正の関連を持つと考えられる。本研究ではストレス状況におけるコーピングではなく、達成場面における、課題達成前の対処方略について検討したい。そのため本研究では、外山(2005)のテスト対処方略尺度を使用する。そして、その中でも達成場面で適応的な方略である、積極的方略と、内的要因／外的要因への悲観との間の関連を検討する。外的要因への悲観が高いほど、また内的要因への悲観が低いほど、積極的方略を使う頻度が高いのではないかと予測される。

よって研究 4 では、以下の 3 つの仮説を立て、モデルを検討した。

仮説 1 : 外的要因への悲観はコントロール感には結びつかないが、積極的方略と正の関連を持つだろう

仮説 2 : 内的要因への悲観はコントロール感とも、積極的方略とも負の関連を持つだろう

仮説 3 : 積極的方略は、達成動機との間に正の関連を持つだろう

方法

調査協力者

東洋大学に通う、日本人大学生 112 名（男性 38 名・女性 74 名）を対象とした。平均年齢は、20.15 歳(SD = 1.02)であった。

測定尺度

この研究 4 では、試験が行われる前に、試験に関する内的要因への悲観、外的要因への悲観を測定した。研究 2、研究 3 と同様の 7 項目を用いて、はじめの教示を「今回の試験で良い成績をとることを、阻害するような要因をリストしてあります。」という文章に置き換え、内的要因への悲観、外的要因への悲観を測定した。更に、研究 3 と同様の項目によって、試験に関するコントロール感を測定した。積極的方略は、外山(2005)で使用されたテスト対処方略尺度の下位尺度のうち、「積極的方略」「回避的思考方略」「楽観的思考方略」と命名された項目のうち、因子負荷の高かった 2 項目ずつを選定した。そして、「今回の試験に向けて、以下のような方略をどの程度使ってきましたか」と尋ね、「1. まったく使わなかった」から「7. 非常によく使った」の 7 件法で測定した。分析に使った項目の詳細は、付録 4 に記載した。

測定手続き

授業終了後の教室に赴き、30 分程度の調査に協力してほしいという依頼をし、質問紙を配布した。

結果

表 4-1 に、各変数間の記述統計量と相関関係を記載した。なお、本研究においては、内的／外的要因への悲観を測定する 7 項目が、研究 2 や研究 3 と同様の因

子構造にならず、能力に関する項目と、課題の難しさに関する項目が、どの因子への負荷も低い、という結果となった。そのため、能力に関する項目以外を内的要因への悲観、課題の難しさに関する項目以外を外的要因への悲観として加算した。表 4-1 の内的要因／外的要因への悲観それぞれの記述統計量は、内的要因への悲観 3 項目を足しあわせて項目数で割ったものと、外的要因への悲観 2 項目を足しあわせて項目数で割ったものである。なお、能力に関する項目、課題の難しさに関する項目を加えた場合でも、モデルの関連パターンに違いは見られなかった。

さらに、本研究で使用したテスト対処方略尺度の 6 項目について因子分析したところ、積極的方略 2 項目のうち 1 項目「計画を立ててそれに従う」のみが、どの因子とも負荷が低かった。そして、積極的方略 2 項目のうち、もう 1 項目の「勉強方法を工夫する」は、外山(2005)の下位因子のうち「楽観的方略」と負荷が高かった。そこで本研究では、「計画を立ててそれに従う」1 項目のみを、積極的方略得点として扱うこととした。なお、他の楽観的思考方略、回避的思考方略は他の変数との間に有意な関連が見られず、これらを独立変数として投入した場合でも投入しなかった場合でも、モデルの重要な結果は変化しなかった。よって今後の分析では、積極的方略得点のみを「方略」として扱うこととする。

表 4-1 より、仮説どおり、コントロール感と積極的方略は達成動機との間に正の関連を持っていたことが分かった。

この結果を基に、パス解析を行った。パス解析の適合度指標は $GFI = 0.99$, $AGFI = 0.96$, $RMSEA = 0.00$ となり、これは研究 3 におけるパス解析の適合度指標よりも高い値となった。まず内的要因への悲観は研究 3 と同様に、コントロール感との間に負の関連を持ち、コントロール感が達成動機との間に正の関連を持っていた。そして内的要因への悲観は、積極的方略との間にも負の関連を持ち、積極的方略が達成動機との間に正の関連を持っていた。一方で外的要因への悲観は、研究 3 と同様に、コントロール感との間には有意な関連は見られなかつ

た。そして、積極的方略との間に正の関連を持ち、積極的方略が達成動機との間に正の関連を持っていた。

表 4-1. 各変数間の記述統計量と相関関係

	1	2	3	4	5	<i>M</i>	<i>SD</i>
1. 内的要因への悲観	1					4.57	1.23
2. 外的要因への悲観	.16	1				3.61	1.38
3. コントロール感	-.20 *	-.06	1			4.74	1.39
4. 積極的方略	-.26 **	.16	.24 *	1		4.32	1.48
5. 達成動機	-.23 *	-.08	.44 **	.33 **	1	5.24	1.13

* $p < .05$, ** $p < .01$, † $p < .10$

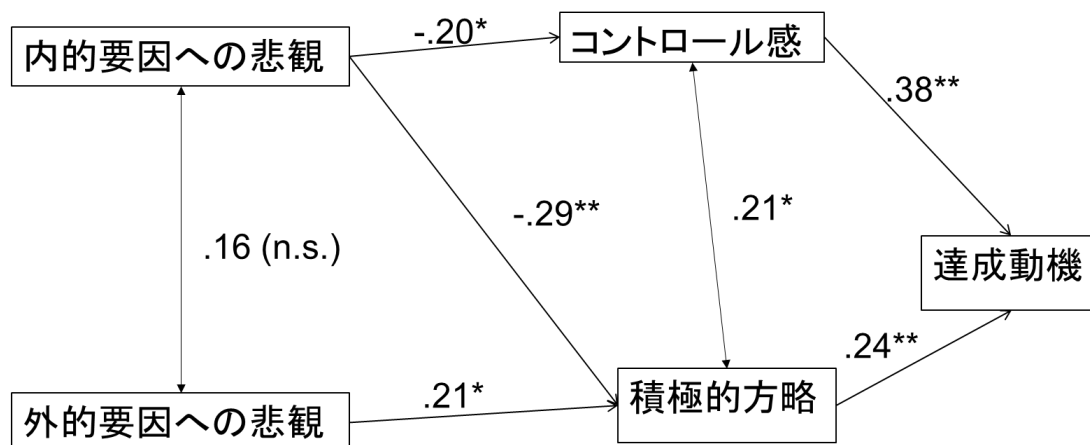


図 4-1. 二種類の悲観性、コントロール感、積極的方略、達成動機との関連に関するパス解析の結果

考察

研究 4 は、日本人大学生を対象とし、内的要因への悲観と外的要因への悲観と達成動機との間の関連に関するモデルを完成させることを目的とした。研究 3 で、コントロール感を投入したモデルを作成したところ、内的要因への悲観はコントロール感と結びつき達成動機に結びつくが、外的要因への悲観はコントロール感とは結びつかず、コントロール感とは関連のない経路で達成動機と結びつくものであることが分かった。そこで研究 4 では、内的要因への悲観、外的要因への悲観がそれぞれ、達成場面で効果的に機能するための方略なのではないかと予測し、積極的方略をモデルに入れた。

その結果、研究 3 の結果と同様、内的要因への悲観はコントロール感と負の関連を持ち、達成動機に結びついていた。さらに内的要因への悲観は、積極的方略と負の関連を持ち、逆に外的要因への悲観は積極的方略と正の関連を持ち、積極的方略が達成動機と正の関連を持っていた。研究 3 と同様、外的要因への悲観はコントロール感とは有意な関連を持たなかった。また、積極的方略を入れていなかった研究 3 よりも、モデル適合度が上昇していた。

以上の結果から、外的要因への悲観が積極的方略を経て達成動機に結びつくことを予測した仮説 1 は支持されたといえる。更に、内的要因への悲観が、コントロール感と積極的方略を経て達成動機に結びつくことを予測した仮説 2 と、積極的方略が達成動機と正の関連を持つことを予測した仮説 3 も支持されたといえる。

これらのことから、内的要因への悲観に関しては、低く持つことで、コントロール感や積極的方略に媒介され、達成動機に結びつくと言える。この結果は、研究 3 と一貫した結果であるといえる。そして、逆に、外的要因への悲観は、高く持つことで、積極的方略に媒介され、達成動機に結びつく、といえる。すなわち、内的要因への悲観を低く持ち、外的要因への悲観を高く持つということが、

日本人の間では積極的方略であり、それが達成動機へと結びついていた、ということが言える。研究 2、研究 3、研究 4 の結果を総合して、日本人の間では、単に遂行成績に対して悲観をするだけでなく、内的要因への悲観を低く持ち、外的要因への悲観を高く持つ、というように、悲観をする側面としない側面と使い分けるといことが、達成動機へと結びつく適応的な方略であるといことが言えた。

この結果が、アメリカ人の間でも見られるのか、続く研究 5 では、アメリカ人大学生の間での調査を行い、比較文化的に検討する。

研究 5 : アメリカ人の間での、悲観性と達成動機との関連のモデルに関する追加調査

目的

これまでの研究 2、研究 3、研究 4 では、主に日本人大学生を対象とし、二種類の悲観性と達成動機との関連についてのモデルを完成させることを目的としてきた。そして、日本人大学生の間では、外的要因への悲観が肯定的な機能を持ち、達成動機との間に直接の正の関連があること（研究 2）、外的要因への悲観が、一次的コントロールを経ずに、達成動機と正の関連を持つこと（研究 3）、また、外的要因への悲観が、積極的方略という、過去の研究でも肯定的な機能が指摘されてきた方略を経て、達成動機へと結びつくものであるということ（研究 4）が明らかになった。

研究 5 では、この傾向が、文化的に普遍のものと言えるのかを検討するため、アメリカ人大学生の間で同様の調査を行うことを目的とする。前述したように、悲観性、楽観性に関しては、特に日米で文化差があることが指摘されている。また、研究 2 においても、内的要因への悲観の他の変数との相関パターンに文化差はほぼ見られなかったが、特に外的要因への悲観の機能が、アメリカ人の中で異なるという結果が見られている。そのため、アメリカ人の中では内的要因への悲観の機能は日本人の間と同様の傾向が見られるものの、外的要因への悲観の機能は異なるのではないかと考えられる。そこで研究 5 では、アメリカ人の中で、日本人の間で見られたモデルが適合するかを検討する。具体的には、研究 5-1 では研究 3 の再現を、研究 5-2 では研究 4 が再現されるかを検討する。

なお、研究 5-1 も研究 5-2 も、同じアメリカ人大学生の調査対象者に対して同じ時に測定された尺度を扱っているが、今回は研究 3、研究 4 との比較のしやすさを考慮し、その調査結果について別々に示す。

研究 5-1: アメリカ人大学生の間での、悲観性の二側面・コントロール感・達成動機の間に関連について

目的

研究 5-1 では、アメリカ人大学生を対象に、研究 3 で日本人の間で見られたような、コントロール感と二種類の悲観性、達成動機との関連がアメリカ人の間でも見られるのか、検討することを目的とした。研究 2 において、アメリカ人大学生の間では、外的要因への悲観と内的要因への悲観の性質が、日本人大学生の間ほど異なることが示唆された。また、日本人大学生の間では、外的要因への悲観が、内的要因への悲観と比べて肯定的な機能をもっているが、アメリカ人大学生の間で外的要因への悲観は、日本人大学生の間ほど肯定的な機能をもっていないということも明らかになった。これらのことを総合すると、日本人の結果と異なり、外的要因への悲観はアメリカ人大学生の間では、達成動機との間に、正の関連は持たないのではないかと予測される。

さらに、従来の研究で、コントロール感自体にも、文化差が指摘されている。欧米人の中で一次的コントロールは重要なものであり、東アジア人と比較しても、欧米人は一次的コントロールを頻繁に使用する、ということが指摘されている (Weisz et al., 1984)。これらのことから、日本人とは異なり、アメリカ人の間では、研究 3 で見られたように、外的要因への悲観からの達成動機への、コントロール感を経由しない正のパスは存在せず、逆に負のパスになるのではないかと予測される。

ただし内的要因への悲観に関しては、研究 2 においても、達成動機との関連パターンに、日米で文化差は見られなかった。このことから、内的要因への悲観がコントロール感と負の結びつきを持ち、コントロール感が達成動機との間に正の

関連を持つ、という傾向は、アメリカ人の間でも見られるのではないかと考えられる。

よってこの研究 5-1 では、アメリカ人大学生の間でのパス図に関して、以下の 2 つの仮説を立てて検証する。

仮説 5-1①: アメリカ人大学生の間では、内的要因への悲観はコントロール感と負の関連を持ち、コントロール感が達成動機との間に正のパスを持つだろう

仮説 5-1②: アメリカ人大学生の間では、外的要因への悲観は達成動機との間に負の関連が見られるだろう

方法

調査協力者

Maryland University のアメリカ人大学生 129 名（男性 33 名・女性 96 名：平均年齢 20.24 $SD=2.70$ ）を対象にした。調査協力の要請もオンラインで行い、自分自身に対する考え方についての 30 分程度のオンライン調査に協力してほしい旨をインフォームドコンセントのオンラインフォーマットに入力し、オンライン上でサインをしてもらった。調査に協力した学生には単位が与えられた。

測定尺度

内的要因への悲観、外的要因への悲観は、研究 2 と同様の尺度を用いて測定した。コントロール感、達成動機も、研究 3 で用いた測定項目と同様の項目を、committee approach (Brislin, 1980)を用いて英訳した。項目の詳細は、付録 3 に記載してある。

調査手続き

調査はすべて、オンライン調査用のシステム REAS を用いて行われた。調査協力者は、インフォームドコンセントフォームに記載された、オンライン調査項目への URL にアクセスし、回答した。

結果

アメリカ人の中での、学業や仕事全般に対する内的要因への悲観、外的要因への悲観の因子構造は、研究 2 と同様であった。表 5-1①に、変数間の相関関係と、各変数の記述統計量をまとめた。研究 2 におけるアメリカ人大学生の中での結果と同様、内的要因への悲観と外的要因への悲観の、他変数との相関パターンに違いは見られず、内的要因への悲観も外的要因への悲観も、コントロール感や達成動機と負の相関を持つことが明らかになった。

更に、図 5-1①に、各変数間のパス解析の結果を示した。その結果、研究 3 の、日本人の中でのパス図とは異なるパス図において、適合度指標が最大となった($GFI = 1.00$, $AGFI = 0.98$, $RMSEA = 0.00$)。図からもわかるように、内的要因への悲観はコントロール感と負の関連を持ち、コントロール感は達成動機との間に正の関連を持っていた。更に、内的要因への悲観は達成動機との間にも、直接の負の関連が見られた。しかしながら、外的要因への悲観は内的要因への悲観との間に正の関連は見られたものの、他の変数との間には有意な関係を持たず、達成動機との間にも、有意な関連を持たなかった。

表 5-1①

	1	2	3	4	M	SD
1. 内的要因への悲観	1				3.16	1.35
2. 外的要因への悲観	.41 **	1			2.79	1.38
3. コントロール感	-.28 **	-.19 *	1		5.89	1.09
4. 達成動機	-.35 **	-.20 *	.45 **	1	6.03	1.03

* $p < .05$, ** $p < .01$, † $p < .10$

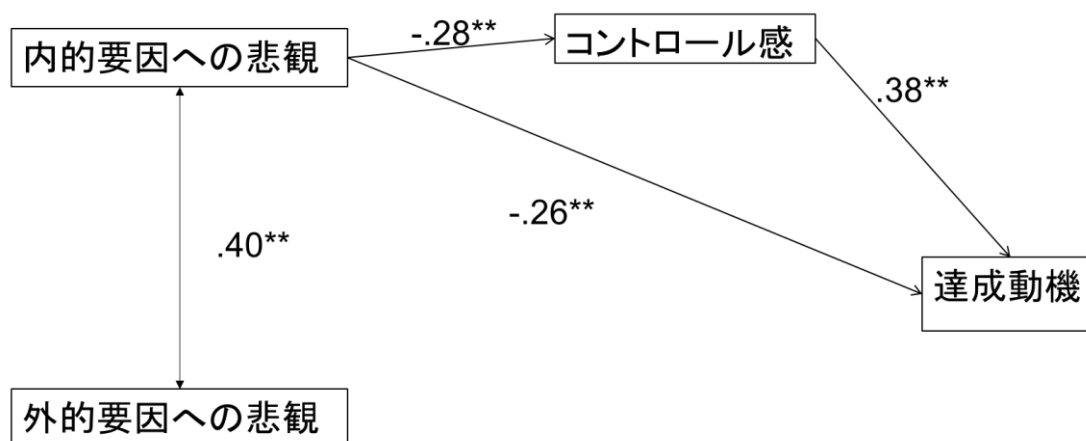


図 5-1①二種類の悲観性、コントロール感、達成動機の間に関するパス解析の結果（アメリカ人大学生対象）

考察

この研究 5-1 は、アメリカ人大学生を対象にし、研究 3 で日本人の間で見られた結果が、アメリカ人の間でも再現されるか否かを検討することを目的とした。その結果、アメリカ人の間では、内的要因への悲観のみが、達成動機と直接負の関連を持っていた。そして、アメリカ人の間では、内的要因への悲観がコントロール感との間に負の関連を持ち、コントロール感が、達成動機と正の結びつきを

もっていた。研究 3 において、日本人の間でも、内的要因への悲観はコントロール感との間に負の関連を持ち、コントロール感は達成動機との間に正の関連を持っていた。このことから、予測したとおり、内的要因への悲観に関しては、アメリカ人の間でも日本人の間でも、同様の傾向が見られたと言える。すなわち、能力などの内的要因に関する悲観性を低く持つことが、学業成績へのコントロール感を高め、そして達成動機を高めるのだと考えられる。これらのことから、アメリカ人の間でも内的要因への悲観に関するパスは日本人と共通であろうということとを予測した、仮説 5-1①は支持されたといえる。

一方で、仮説 5-1②に反して、外的要因への悲観は、内的要因への悲観との間に正の相関があったのみで、パス内のどの変数との間にも有意な関連を持たなかった。つまり、内的要因への悲観と関連する部分を統制すると、外的要因への悲観は達成動機やコントロール感とは関連しなかったということである。内的要因への悲観と共通する部分とは、どの要因であるかには関わらず悲観的になる傾向であると考えられる。そのため、これを統制すると、外的要因への悲観独自の性質は、アメリカ人の間では達成動機に対して関連がなかったと考えられる。

これらのことから、研究 2 における結果と同様に、日米では外的要因への悲観の機能に、主な文化差があると考えられる。外的要因への悲観が、コントロール感との間に有意な関連が見られなかったという結果は、日本人の間でもアメリカ人の間でも共通して見られた。しかしながら、日本人の間では、外的要因への悲観は達成動機と正の関連を持つ、という、達成場面における肯定的な機能が示唆されたのに対して、アメリカ人の間では外的要因への悲観は肯定的機能を持たなかったのである。しかしながら、アメリカ人の間で、達成動機との関連は有意ではなかったものの、負の関連が見られたわけではない。このことから、アメリカ人の間では外的要因への悲観は、達成動機に対して悪影響であるというわけではなく、達成場面における変数とは関連がなかった、ということが言える。すなわちアメリカ人の間では、日本人の間でとは異なり、内的要因に対して悲観をしな

いことのみが重要なのであり、外的要因への悲観を戦略として利用して、達成動機を高めるといったことはないと考えられるのである。そのため、研究 4 で日本人の間で見られたような、外的要因への悲観と積極的方略との間の正の関連も、アメリカ人の間では見られない、と予測される。この予測が支持されるか否かを検討するため、続く研究 5-2 では、同じアメリカ人大学生を対象に、研究 4 が再現されるか否かを検討した結果を報告する。

研究 5-2: アメリカ人大学生の間での、悲観性の二側面・方略・コントロール感・達成動機の間に関連について

目的

本研究では、再びアメリカ人大学生を対象とし、日本人の間で研究 4 で見られた結果が再現されるか否かを検討することを目的とする。研究 4 で、日本人の間では、外的要因への悲観と達成動機との間に正の関連があることや、外的要因への悲観はコントロール感を経ず、代わりに学習方略の下位尺度である積極的方略と正の関連を持ち、達成動機と結びついていた。一方で、研究 3 の追調査として行った研究 5-1 によると、アメリカ人の間では、内的要因への悲観は日本人の間でと同様にコントロール感を経て達成動機と結びついていたものの、外的要因への悲観は達成動機へと結びつくパスのうち、どの変数とも有意な関連を持たなかった。これらのことを総合すると、アメリカ人の間では、内的要因に関しては日本人の間と同様に、コントロール感や積極的方略を経て達成動機と関連すると考えられるものの、外的要因への悲観は、積極的方略との間には有意な関連を持たないのではないかと予測される。

以上のことから本研究では、

仮説 5-2①：内的要因への悲観は、コントロール感と積極的方略との間に負の関連を持つだろう

仮説 5-2②：積極的方略は、達成動機とのあいだに正の関連を持つだろう

という仮説を立て、検討する。

方法

調査協力者

Maryland University のアメリカ人大学生 129 名（男性 33 名・女性 96 名：平均年齢 20.24 $SD=2.70$ ）を対象にした。なお前述したように、この研究 5-2 で対象にしたアメリカ人大学生は、研究 5-1 の対象者と同一である。

測定尺度

アメリカ人大学生の間での調査の実施時期は試験前ではなかったため、研究 4 とは異なり、内的要因への悲観、外的要因への悲観、達成動機は、研究 2 におけるアメリカ人大学生の間での尺度と同様の項目を用いて測定した。コントロール感も、研究 5-1 と同様の尺度である。学習方略に関しても、日本における研究 4 の結果と比較検討をするため、研究 4 で日本人の間で、内的要因への悲観、外的要因への悲観と有意な関連が見られたのと同様の、積極的方略を測定する 1 項目を用いた。ただし、「学業や仕事という側面において、以下のような方略をどの程度使っていますか」と尋ね、「1. まったく使っていない」から「7. 非常によく使っている」の 7 件法で測定した。

調査手続き

調査はすべて、オンライン調査用のシステム REAS を用いて行われた。日本における研究 4 との比較検討のため、試験の 1 週間から 2 週間程度前の時期に調査を実施した。

結果

表 5-2①に、変数間の相関関係と記述統計量をまとめた。次に、達成動機を従属変数とするパス解析を行った。適合度指標が最大となったモデルを図 5-2①に

示した。適合度指標は、GFI = 0.99, AGFI = 0.96, RMSEA = 0.00 となった。図 5-2①からもわかるように、内的要因への悲観は、コントロール感と積極的方略それぞれとの間に負の関連が見られた。そしてコントロール感と積極的方略も、それぞれ達成動機と正の関連が見られた。一方で外的要因への悲観は、内的要因への悲観との間に正の関連が見られたが、他の変数との間には有意な関連は見られなかった。

表 5-2①アメリカ人の間での相関関係と記述統計量の表

	1	2	3	4	5	M	SD
1. 内的要因への悲観	1					3.16	1.35
2. 外的要因への悲観	.41 **	1				2.79	1.38
3. コントロール感	-.28 **	-.19 *	1			5.89	1.09
4. 積極的方略	-.28 **	-.33 **	.23 **	1		5.40	1.25
5. 達成動機	-.35 **	-.20 *	.45 **	.33 **	1	6.03	1.03

* $p < .05$, ** $p < .01$, † $p < .10$

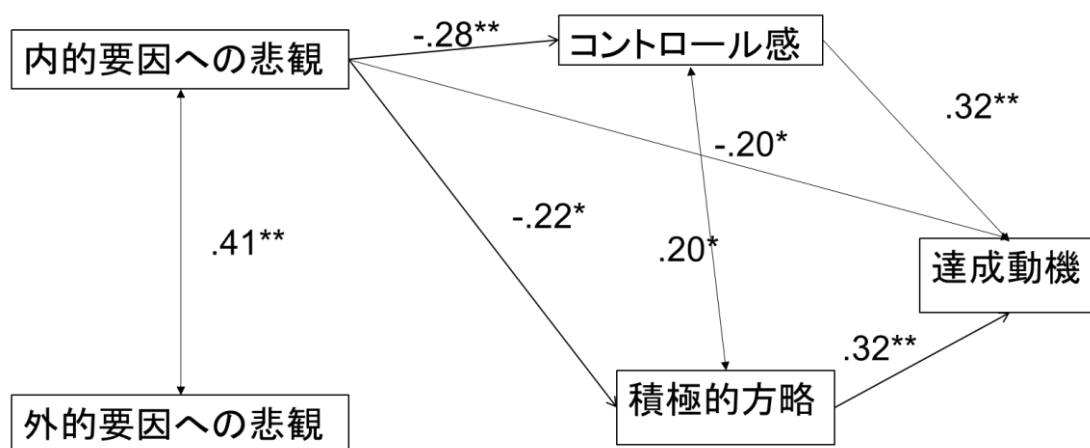


図 5-2①アメリカ人の間でのパス解析の結果(GFI = 0.99, AGFI = 0.96, RMSEA = 0.00)

考察

本研究では、日本人の間で研究 4 で見られた傾向がアメリカ人の間でも見られるか否かを検討するために行った。すなわち、内的要因への悲観がコントロール感と積極的方略、外的要因への悲観が積極的方略に結びつき、達成動機に結びつく、という日本人の間で見られたパスが、アメリカ人の間でも見られるのか否かを検証した。

その結果、内的要因への悲観はコントロール感、積極的方略と負の関連を持ち、コントロール感と積極的方略はそれぞれ達成動機と正の関連を持っていた。すなわち内的要因への悲観は、コントロール感と積極的方略を経て達成動機と結びついていたといえ、これは仮説 5-2①、仮説 5-2②を支持する結果であった。一方で、外的要因への悲観は、内的要因への悲観と正の相関を持っていたが、他の変数との間には有意な関連を持たず、この研究 5-2 で新たに加えた、積極的方略との間にも、有意な関連が見られなかった。

日本人大学生の間で同様の調査を行った研究 4 では、内的要因への悲観とコントロール感、積極的方略との関連は、今回のアメリカ人大学生の結果と同様であった。他の、研究 2～研究 4 までの結果を総合して、能力などの内的要因に対する悲観を低く持つことが、課題に対するコントロール感や積極的方略と結びつき、最終的に達成動機に結びつくという関連パターンは、文化的に普遍的なものであることが示唆される。実際に、有能感を高く持つことが動機付けに結びつく、という指摘は、古くからなされている(e.g., White, 1959)。すなわち日本人であってもアメリカ人であっても、能力などの内的要因に対しては悲観しないことが効果的な方略である、という本研究における結果は、先行研究と一貫したものであるといえる。これらのことから、内的要因への悲観には、日本とアメリカで、機能的等価性があった、と言える。

一方で、外的要因への悲観に関しては、日米で大きな文化差が見られた。日本人の間では、外的要因への悲観はコントロール感には結びつかないが、課題への積極的方略と正の関連を持ち、最終的に達成動機へと結びつく、というパスが見られた。しかしながらアメリカ人の間では、外的要因への悲観は達成に関するほとんどの変数との間に有意な関連を持たなかった。これらのことから総合して、外的要因への悲観は日本人の間でのみ、積極的な方略や達成動機に肯定的な機能を持つといえる。

ここまでの研究で、外的要因への悲観は、日本人の間でのみ、達成に関する肯定的な方略と関連することが明らかになった。研究 6 では、この日本人の間で見られた外的要因への悲観が、別の変数に関しても、適切に機能をするのか、より長期的に検討する。悲観性のメリットに関する先行研究において、悲観性は一時的には達成場面で肯定的な機能を持つが、長期的には心理的 **well-being** が阻害され、達成場面での肯定的機能も失われるリスクも持つことが指摘されている（荒木, 2012）。外的要因への悲観が、長期的にも適応的であると言えるのかを調べるためには、研究 5 までのような短期の調査ではなく、より長いスパンでの調査が必要である。よって、続く研究 6 では、日記式調査を行い、日々の生活における達成動機と心理的 **well-being** と、二種類の悲観性との関連についての日米比較を行う。

第二部のまとめ

第二部では、日本人大学生、アメリカ人大学生の間で、二種類の悲観性がどのようにして達成動機と関連をするのか、パスモデルを作成することを目的とした。第一部において、日本人とアメリカ人との間で、特に外的要因への悲観と他の変数との関連パターンが大きく異なるという結果が見られたが、具体的にはどのように悲観性が達成動機に結びつくのかの検討が必要であったためである。

その結果、内的要因への悲観が達成動機へと結びつくパスは、日本人の間でもアメリカ人の間でも共通していた、と言える。すなわち日本人の間でもアメリカ人の間でも、内的要因への悲観は、コントロール感、積極的方略と負の関連を持ち、コントロール感と積極的方略が、それぞれ達成動機との間に正の関連を持っていた。このことから、日本人の間でもアメリカ人の間でも、能力などの内的な要因に関しては、悲観をしないことが達成場面では適応的であるということが示唆された。

一方で、外的要因への悲観は、達成動機との関連パターンに文化差があるということが示された。日米で共通していたのが、外的要因への悲観が、日本でもアメリカでも、コントロール感との間には有意な関連を持たなかったことである。このことから、課題の難しさや運、偶然など、コントロール不可能な要因に対する悲観である外的要因への悲観は、コントロール感とは関わらない変数であるということが言える。しかしながら、日本人の間では外的要因への悲観は、コントロール感とは関わらないが、積極的方略と正の関連を持っており、積極的方略に媒介されて、達成動機へと結びついていた。この関連はアメリカ人の間では見られなかった。このことから、日本人の間では外的要因への悲観は、達成場面における適応的な方略であると言え、アメリカ人の間では方略としては働いていない、ということが言える。

これ以降の研究では、長期的にみても、外的要因への悲観が日本人の間で肯定的な機能を持つかを検討するため、一週間という比較的長いスパンの中での、心理的 well-being との関連を検証する。外的要因に対して悲観をすることは、日本人の間では、心理的 well-being を脅かさないのではないかと予測される。そのため、続く第三部では、研究 6 として、悲観性と心理的 well-being、達成動機との関連について検証する。

研究 6：日々の生活における内的／外的悲観と達成動機・心理的 well-being との関連について

目的

研究 2～研究 5 では、外的要因への悲観という、コントロール感と結びつかない悲観性が、日本人の間でのみ、達成動機や積極的方略と正の関連を持つことが明らかになった。本研究では、外的要因への悲観が、長期的にも肯定的な機能を持っているのかを検討する。悲観性のメリットに関する先行研究で、悲観性は一時的な課題であれば、達成場面で肯定的な機能を持つものの、長期的には心理的 well-being を阻害する可能性があることが指摘されている（荒木, 2012）。しかしながら一方で、研究 3、研究 4 において、日本人にとっての外的要因への悲観は、状況をコントロールする一次的コントロールとは関連がなく、自身の認識をコントロールして心理的 well-being を維持する、二次的コントロールに近いものであることが示唆されている。この二次的コントロールは先行研究において、心理的 well-being を維持する役割を持つことが示されている(e.g., Carroll et al., 2006)。そのため外的要因への悲観は、日本人にとっては心理的 well-being を脅かす材料にはならない可能性が挙げられる。

更にこの可能性の根拠として、過去の比較文化研究で指摘されている、東アジア人の、外的要因への注意の向けやすさも挙げられる。先行研究では、東アジア人は欧米人よりも、外的要因に注意を向けやすく(e.g., Morris et al., 1994)、また外的要因の変化に寛容である、と指摘されている（Peng & Nisbett, 1999）。Peng らによると、東アジア人は欧米人よりも弁証法的思考を持っており、外界が状況に応じて変化する可能性を、より高く見積もっている。これはつまり、外界が悪い方向に変化するのではないか、という悲観的な見方をしている、それは一時的なものである、と言い換えることができるのではないだろうか。すなわち、東アジア人が一時的に外界の変化に関して悲観的な見方をしている、外界

はさらに変化する可能性があると考えているため、また良い方向に変わるのではないか、という認識をしていると考えられる。これらのことを総合すると、東アジア人にとって外界に対する悲観的な見方、つまり外的要因に対して悲観をすることは、心理的 well-being に対する脅威にはならないのではないかと考えられる。そしてそのために、東アジア人は、外的要因への悲観を、達成場面において積極的に使用することができるのではないかと考えられる。

悲観性のメリットに関する先行研究で示されているように、心理的 well-being を脅かすような悲観性を方略として使用した場合、試験などの一度きりの課題であれば、心理的 well-being を犠牲にしても達成動機を保つことができるかもしれない。しかしながら、日常生活などにおいて繰り返し経験する達成場面において達成動機を保つには、心理的 well-being を保つ必要があるのではないかと考えられる。これらのことから、たとえ悲観性を方略として使う人々であっても、達成場面における心理的 well-being を維持することは重要であるといえる。そのため、心理的 well-being を脅かすような方略であれば、日常生活では、積極的に使用されることはないのではないかと考えられる。

これらのことから、研究6では、「日本人の間では、外的要因への悲観は心理的 well-being を脅かさないだろう」という仮説を立てた。この仮説を検証するために日記式調査を行い、日々の生活の中での悲観性と達成動機との関連について検討する。

方法

調査協力者

関西大学に通う日本人大学生 85 名（男性 37 名・女性 48 名・平均年齢 19.87 歳 $SD = 1.36$ ）と、Maryland University に通うアメリカ人大学生 158 名（男性 44 名・女性 114 名：平均年齢 19.25 $SD = 1.24$ ）に調査を依頼した。なお、

アメリカ人大学生の間での対象者は研究 2 と同一であり、日記式調査の第 1 日目に研究 2 で用いた項目を測定し、第 2 日目以降に、研究 6 で繰り返し測定する日記式調査の項目を用いた。

手続き

すべての調査は、オンライン上のシステム REAS を用いて行った。日本人大学生の間では、授業終了後にオンライン調査の説明が書かれた用紙を配布し、協力を依頼した。日本人大学生の間でもアメリカ人大学生の間でも、調査は完全なる匿名であることを事前に説明した。質問項目を送信するためにメールアドレスが必要であったが、このメールアドレスは調査項目を送信する以外の目的に使われることがないことを強調した。実際に、メールアドレスは氏名とは別に「調査協力者 1」「調査協力者 2」といった形で番号をふって保存をし、調査項目の掲載された URL を送信する際には BCC 機能で一斉送信した。

まず第 1 日目に、内的要因への悲観と外的要因への悲観を測定した。第 2 日目以降に、日記式調査を行った。まず、「今日一日で、以下のようなことはどの程度起こりましたか」と尋ね、その日に起こったネガティブ・ポジティブな学業的出来事を測定した。心理的 well-being を測定するために、「今日一日で、以下のような感情を、どの程度感じましたか」と尋ね、その日に感じたポジティブ気分とネガティブ気分を測定した。翌日への達成動機は、「勉強・仕事という側面に関して、明日、あなたはどの程度努力しようと思いますか」と尋ね、「1. まったくそう思わない」～「7. 非常にそう思う」の 7 件法で測定した。以上の 3 つの変数を、第 2 日目から第 7 日目まで、6 日間繰り返し測定した。調査項目は毎日午後 8 時に全員に一斉に送信された。

測定尺度

内的要因への悲観、外的要因への悲観尺度は、研究 2～研究 5 で用いられた尺度と同様の尺度を使用した。その日のネガティブ・ポジティブな学業的出来事は、Maybery (2003) の negative events scale と、Maybery (2004) の positive events scale から、達成に関する 2 項目ずつを抜粋した。抜粋の際には、Maybery (2003) の研究において因子負荷量の高い項目を抜粋した。具体的には、「勉強・学業に関して、うまくいかないことがあった (／うまくいった)」と、「勉強すべきことや授業での課題等の期日に関して、うまくいかないことがあった (／うまくいった)」を使用した。そして、「以下のような出来事は、今日一日で起こりましたか。また、起こったとしたら、あなたはそれによってどの程度煩わされましたか (／気持ちが高まりましたか)」と尋ね、「0. このような出来事は起こらなかった」～「5. このような出来事が起こり、非常に煩わしかった (／気持ちが高まった)」の 6 件法で測定した。更に、その日のネガティブ気分を、PANAS 尺度(Watson, Clark, & Tellegen, 1988)を用い、「今日一日で、以下のような感情を、あなたはどの程度感じましたか。1 (全く感じなかった) ～5 (非常に感じた) からお選びください。」と尋ねた。

結果

まず他の研究と同様、内的／外的悲観を測定する 7 つの項目に関して因子分析 (プロマックス回転) を行ったところ、日本人の間では研究 2、研究 3 と同様の、アメリカ人の間でも、研究 2、研究 5 と同様の因子構造となった。そこで、項目への得点を足し合わせて項目数で割り、内的要因への悲観得点、外的要因への悲観得点を算出した。その日の学業的出来事尺度に関しては、2 項目の得点を足し合わせた。ネガティブ気分、ポジティブ気分の尺度に関しても、Watson, et al. (1988) の分類を基に、10 項目を足し合わせた。

日本人の間での、一日目の測定した内的要因への悲観($M = 4.77$, $SD = 1.09$)と外的要因への悲観($M = 3.96$, $SD = 1.39$)の間の相関関係は、 $r = -.14$, n.s. であった。なお、前述したように、アメリカ人の間での、一日目に測定した変数間の相関関係及び各変数の記述統計量は、表 2-3 と同一である。

次に、日記式調査を行って得られた翌日への達成動機を従属変数とした、HLM (Hierarchical Linear Model)を行った。図 6-1 に、翌日への達成動機を従属変数としたモデルを、図 6-2 に、心理的 well-being (その日のネガティブ気分) を従属変数としたモデルを記載した。

表 6-1 は、翌日への達成動機を従属変数としたモデルの分析結果、表 6-2 は、その日の心理的 well-being (ネガティブ気分) を従属変数としたモデルの分析結果である。まず表 6-1 からは、日本人の間で、切片と外的要因への悲観との間に正の関連が見られたことが分かる。これはつまり、翌日への達成動機の 6 日間の平均値と、外的要因への悲観との間に正の関連があるということである。さらに日本人の間では、ポジティブな学業的出来事と翌日への達成動機との間に正の関連があり、その傾きと外的要因への悲観が、10%水準ではあるが負の関連を持つことが分かった。すなわち、ある一日のポジティブな学業的出来事が、翌日への達成動機と持つ正の関連の度合いが、外的要因への悲観が高い人ほど小さいということが言える。

一方でアメリカ人の間では、外的要因への悲観は他の変数との間に有意な関連を持たず、内的要因への悲観が、切片との間に負の関連を持つのみであった。

表 6-2 には、ネガティブ気分を従属変数とした HLM の結果を記載した。アメリカ人の間でのみ、切片と外的要因への悲観との間に有意な正の関連が見られた。すなわち、アメリカ人の間では、ネガティブ気分の 6 日間の平均値が、外的要因への悲観が大きい人ほど高いということが分かった。更に、日本でもアメリカでも共通して、その日のネガティブな学業的出来事が、その日のネガティブ気分との間に正の関連を持っていた。しかしながらその傾きに対して、日本人の間

では、外的要因への悲観が有意な負の関連を持っていたが、アメリカ人の間では、10%水準ではあるが、外的要因が逆に正の関連を持っていた。すなわち、日本人の間では、ネガティブな学業的出来事を達成した日にネガティブ気分を感じる度合が、外的要因への悲観が高い人ほど低く、アメリカ人の間では、逆に高いことを意味している。

Level1: 従属変数=翌日への達成動機

翌日への達成動機 = $P0 + P1*(\text{ネガティブな学業的出来事}) + P2*(\text{ポジティブな学業的出来事}) + P3*(\text{ポジティブ気分}) + P4*(\text{ネガティブ気分}) + E$

Level2:

$P0 = B00 + B01*(\text{内的要因への悲観}) + B02*(\text{外的要因への悲観}) + R0$

$P1 = B10 + B11*(\text{内的要因への悲観}) + B12*(\text{外的要因への悲観}) + R1$

$P2 = B20 + B21*(\text{内的要因への悲観}) + B22*(\text{外的要因への悲観}) + R2$

$P3 = B30 + B31*(\text{内的要因への悲観}) + B32*(\text{外的要因への悲観}) + R3$

$P4 = B40 + B41*(\text{内的要因への悲観}) + B42*(\text{外的要因への悲観}) + R4$

図 6-1. 翌日への達成動機を従属変数とした HLM

Level1: 従属変数=ネガティブ気分

ネガティブ気分 = $P0 + P1*(\text{ネガティブな学業的出来事}) + P2*(\text{ポジティブな学業的出来事}) + E$

Level2:

$P0 = B00 + B01*(\text{内的要因への悲観}) + B02*(\text{外的要因への悲観}) + R0$

$P1 = B10 + B11*(\text{内的要因への悲観}) + B12*(\text{外的要因への悲観}) + R1$

$P2 = B20 + B21*(\text{内的要因への悲観}) + B22*(\text{外的要因への悲観}) + R2$

図 6-2. その日のネガティブ気分を従属変数とした HLM

表 6-1. 翌日への達成動機を従属変数とした HLM の分析結果

	t値	
	日本	アメリカ
切片	29.53 **	73.31 **
内的要因への悲観(B01)	-0.61	-3.32 **
外的要因への悲観(B02)	3.30 **	-0.37
ネガティブな学業的出来事(P1)		
切片(B10)	-0.91	1.55
内的要因への悲観(B11)	0.01	-0.77
外的要因への悲観(B12)	-0.81	-0.72
ポジティブな学業的出来事(P2)		
切片(B20)	2.56 *	-0.12
内的要因への悲観(B21)	-0.53	0.65
外的要因への悲観(B22)	-1.74 †	-0.99
ポジティブ気分(P3)		
切片(B30)	-0.39	-0.01
内的要因への悲観(B31)	1.28	-0.63
外的要因への悲観(B32)	-0.12	1.08
ネガティブ気分(P4)		
切片(B40)	0.79	0.04
内的要因への悲観(B41)	-1.80 †	2.02 *
外的要因への悲観(B42)	-0.86	0.09

* $p < .05$, ** $p < .01$, † $p < .10$

表 6-2. その日のネガティブ気分を従属変数とした、HLM の結果

	t値	
	日本	アメリカ
切片(P0)	31.97 **	37.69 **
内的要因への悲観(B01)	-0.24	1.06
外的要因への悲観(B02)	0.84	2.24 *
ネガティブな学業的出来事(P1)		
切片(B10)	3.08 **	5.16 **
内的要因への悲観(B11)	-0.19	-0.85
外的要因への悲観(B12)	-2.50 *	1.68 †
ポジティブな学業的出来事(P2)		
切片(B20)	0.23	-1.25
内的要因への悲観(B21)	-0.52	-0.53
外的要因への悲観(B22)	-1.71 †	-1.40

* $p < .05$, ** $p < .01$, † $p < .10$

考察

本研究は、日本人大学生とアメリカ人大学生との間で、日々の生活の中での達成動機、心理的 well-being と、内的／外的要因への悲観との関連を検証するために行った。研究 2～研究 5 で、内的要因への悲観の機能は日本とアメリカとで変わらなかったものの、外的要因への悲観の機能には文化差があり、日本人の間でのみ、外的要因への悲観は達成場面で適応的な機能を持つことが示唆された。しかしながら、悲観性は長期的には心理的 well-being、ひいては達成動機に悪影響を及ぼすとする指摘もあるため、研究 6 では、内的／外的要因への悲観と、心理的 well-being との関連についても検討した。そこで、この傾向が日常生活で見られるのかを検証するため、日記式調査を行った。

翌日への達成動機との間の関連

その結果、日本人の間では、翌日への達成動機の6日間の平均値と、外的要因への悲観との間に正の関連が見られた。このことは、日本人の間で、外的要因への悲観を高く持つ人が、日常生活でも平均的に翌日への達成動機を高く持つことを示している。このことから、外的要因への悲観が達成動機に対してポジティブな機能を持つことを示唆した研究2～研究5の結果が、日々の生活の中でも再現できたといえる。

さらに日本人の間では、ポジティブな学業的出来事と翌日への達成動機との正の傾きに対して、外的要因への悲観が負の関連を持っていた。これは、日本人の間で外的要因への悲観が高い人にとっては、その日に起こったポジティブな出来事があったために達成動機が高いわけではなく、もともと平均的に達成動機を高く持つことを裏付ける結果であるといえる。外的要因への悲観を高く持たない人にとっては、翌日への達成動機は、その日に起こったポジティブな出来事に左右される。しかしながら外的要因への悲観の高い人は出来事に左右されず、平均的に高い達成動機をもっていると考えられるのである。

一方で、アメリカ人の間では、日本人の間で見られたような外的要因への悲観の機能は確認されなかった。これも、アメリカ人の中で内的／外的要因への悲観と達成動機との関連モデルを作成した、研究5と同様の結果であるといえる。さらにアメリカ人の間では、内的要因への悲観は、翌日への達成動機の6日間の平均値との間に負の関連が見られた。この結果も、研究5と同様の結果である。すなわちアメリカ人の間では、外的要因に対する悲観は達成場面では機能せず、内的要因への悲観のみ低く持っていれば、達成動機を高く持つことができる、ということがいえる。

心理的 well-being との関連

日本人の間でもアメリカ人の間でも、その日に起こったネガティブな学業的出来事とその日のネガティブ気分との間に正の関連があり、その傾きと、外的要因

への悲観との関連が、日本では負、アメリカでは正であった。これはつまり、日本人の間でもアメリカ人の間でも、その日にネガティブな学業的出来事が起こるとネガティブ気分が高くなることを意味する。ただし、その度合は、日本人の間では外的要因への悲観が高い人ほど小さく、アメリカ人の間では逆に大きいことが言える。言い換えると、外的要因への悲観には、日本人の間では、ネガティブな出来事が起こった日にネガティブ気分が上昇するのを抑えるレジリエンシー機能があるが、アメリカ人の間では外的要因への悲観を高く持つことは、ネガティブな出来事が起こった時の心理的 well-being を、より悪化させるということが分かった。

更にアメリカ人の間では、ネガティブ気分の切片と、外的要因への悲観との間に有意な正の関連が見られた。すなわち、アメリカ人の間では、外的要因への悲観を高く持つ人は、平均的にネガティブ気分を高く持つ、ということである。

これらのことから、これまでの研究と同様に、外的要因への悲観の関連パターンには、文化差が見られたといえる。つまりアメリカ人の間では、外的要因への悲観を高く持つことは、日々の生活における心理的 well-being を、平均的に阻害しており、またネガティブな出来事を経験した日に、心理的 well-being がより阻害されやすいということが言える。これは、日本人とは真逆の結果である。この結果は、アメリカ人のコントロール感の高さによるものであると考えられる。すなわち欧米人は、一次的コントロールを使用する頻度が高く(Weisz et al., 1984)、コントロール感の度合いも東アジア人と比べて高い(Heine et al., 1995)。このような性質を持つアメリカ人にとって、自身でコントロールができない外的要因に悲観をすることは、心理的 well-being を脅かすものであり、達成動機を保つためには利用することのできないものであったと考えられる。

研究 6 の結果を総合すると、日本人の間では、外的要因への悲観を高く持つ人は日常生活においても平均的に高い達成動機を維持しており、また、ネガティブな出来事を経験した後であっても、その出来事が心理的 well-being を阻害する度

合を低くすることができることが指摘される。前述したように、悲観性のメリットを指摘する先行研究にはそれぞれに未検討点があるため、心理的 well-being を保ちつつ、達成動機を高く持つことのできる悲観性は未だに確認されていなかった。この研究 6 の結果から、少なくとも日本人の間では、悲観性の中でも特に外的要因への悲観を高く持つことにより、心理的 well-being を阻害せず、なおかつ達成動機を高く持つことができるのだということが示唆された。

総合考察

本論文を通しての大きな目的は、現在や未来の自分自身に対する肯定的な評価が相対的に低いとされる東アジア人、特に日本人の間で、将来に対してどのような認識を持っていれば適応的にふるまえるのかを、検討することであった。将来の自分自身に対する肯定的な評価をすることには適応的な機能も多いが、現実的には、将来への希望を持つことが難しいこともある（山田, 2007）。このような現状で、どのような認識を持っていれば適応できるのか、本論文を通して、その疑問に対して一定の回答を出すことができたと考えている。

本研究の意義として、次の2点が挙げられる。第一に、特に日本人の間で、心理的 well-being を保ちつつ達成動機を保つために、将来に対してどのような認識をすればよいのかが分かった点、第二に、達成場面において、一次的コントロール以外にも、肯定的な機能があることを示すことができた点である。

達成場面における適応的な悲観性について

本論文の研究を通して、特に日本人の間では、将来に対して、自身の能力などの内的な要因に対しては心配をせず、運や課題の難しさなどの外的な要因に対しては心配をする、ということが、達成場面において最も適応的であるということが明らかになった。

研究2から研究5では、日本人の間では外的要因に対する悲観が、達成場面で肯定的な機能を持つことが明らかになった。すなわち外的要因への悲観は、積極的方略と正の結びつきを持ち、達成動機と結びついていた。先行研究では、達成動機を保つということは、実際の課題場面での努力量や遂行成績も高めることが示されている(Solberg et al., 2009)。そのため、日本人の間では、外的要因に対して悲観をすることが、達成場面で肯定的な機能を持つ、ということが言えた。

さらに本研究 6 の結果から、日本人の間では、外的要因に対して悲観をしておくことは、日々の生活における平均的な達成動機を保つだけでなく、日々の生活の中で、実際にネガティブな出来事を経験した時のレジリエンシーにつながるということが明らかになった。この結果から、外的要因への悲観は、少なくとも日本人の間では、心理的 well-being を保ちつつ達成場面で適応的な機能を持つ悲観性であるといえた。

先行研究において、悲観性のメリットを示す研究には 2 つの流れがあったが、いずれの流れにもデメリットがあり、心理的 well-being を保ちつつ、達成動機を保つような悲観性については発見されていなかった。防衛的悲観主義の定義において、「不安感を原動力として達成動機を維持する」ということが述べられている(e.g., Norem et al., 1986)。これは具体的には、悪い結果を考えておくことで、成功しなければならないというプレッシャーから解放され、課題直前には不安感が軽減される、というプロセスが予測されている (Norem, 2002; 外山, 2011)。しかしながら、このプロセスは実証的には示されておらず、防衛的悲観主義者の不安感は、いくら悪い結果を予測していても、課題直前まで軽減されることがない、という結果が見られている (外山, 2011)。そして、防衛的悲観主義者は失敗経験に対して脆弱であり、長期的には達成場面で適応的とは言えないという結果も見られている (荒木, 2012)。そのため防衛的悲観主義は、達成場面で短期的には肯定的機能を持つが、心理的 well-being に悪影響であり、長期的には非適応的である、という可能性が否めなかった。

本論文における結果から、外的要因への悲観をすることは、心理的 well-being に悪影響を及ぼさず、むしろ実際のネガティブな出来事に対するレジリエンシー効果があることが明らかになった。このことをふまえて考えると、防衛的悲観主義者が悪い結果を予測しても不安感が軽減されなかったのは、どの要因に対する悲観をするのかを操作していなかったため、「能力がないためにうまくいなくなる」という状況を想定していた参加者がいたからなのではないかと考えられ

る。もしも、運や課題の難しさなどの外的要因が原因で悪い結果が起こるかもしれない、という結果を予測していれば、仮に失敗をしたとしても、その失敗を外的要因に帰属させることができる。その安心感によって、課題前のプレッシャーを軽減させることができる可能性がある。すなわち、防衛的悲観主義研究で指摘されていた、「成功のプレッシャーからの解放」は、悲観性の中でも、特に外的要因への悲観によってこそ、起こるのではないだろうか。

また、悲観性へのシフト研究では、試験の直前や結果のフィードバックを受ける前に悲観的な予測に切り替えることで、心理的 well-being を保つという機能は示されていたが(Carroll et al., 2006)、この悲観性が達成場面において適応的に機能するののかについては、述べられてこなかった。その理由も、悲観性へのシフトを測定する際に、「試験で何点とれると思いますか」や「年収はどのぐらいになると思いますか」などといった尋ね方をしており、どの側面についての悲観を尋ねているのかが、明確ではなかったことにあると考えられる。

日本における悲観性のシフトを検討した、Fukuzawa et al. (2013)では、試験直前の悲観性は、達成動機との間に有意な関連を持たないことが分かった。これは、Fukuzawa らの研究における悲観性が、達成場面で適応的にも非適応的にも、機能していなかったことを示すものでもある。しかし同時に、Fukuzawa らの悲観性の中に、達成場面において適応的な機能を持つ悲観と、非適応的な機能を持つ悲観とが、混在していた可能性を示唆するものでもある。すなわち、悲観性のシフトで扱われている悲観性にも、達成場面において適応的な悲観性と非適応的な悲観性とが混在している可能性が否めないのである。たとえば、同様に試験直前に悲観性に下方シフトをするのであっても、自身の能力などの内的要因が不十分なのは、と考えると、試験場面で努力をする気が起きない可能性がある。しかし、試験直前に、運や課題の難しさなどの外的要因に対して悲観をすることで、成功へのプレッシャーから解放され、試験場面ではできる限りの努力をすることができるのかもしれない。試験直前などは、現時点からの努力が成果を

結ぶことが期待できないため、内的要因に対しては悲観をしてしまうことがあるだろう。しかし、たとえ内的要因に対して心配をしている状態でも、同時に外的要因への悲観をしていれば、仮に失敗をしても心理的 well-being は保つことができる。その安心感によってプレッシャーから解放され、課題に取り組むことができるのではないだろうか。このように、外的要因への悲観は、内的要因に対して悲観をしているときに、それを補うような働きをする可能性がある。

これらのことから、本論文において、悲観性を内的要因と外的要因に分けることで、これまで別々の流れで研究がすすめられてきた、防衛的悲観主義研究と、悲観性へのシフト研究を、同様の枠組みで検討することも可能になると考えられる。このことは、「悲観性は非適応的な概念ではない」としながらも、長期的には不適応な帰結をもたらすことが否めなかった、これまでの悲観性研究に対して、新たな知見をもたらすものであったと考えられる。

そして、本論文における知見は、現在や将来に対するポジティブな評価をする度合いが少ないとされる東アジア人が、将来に対してどのような認識をすればよいのか、示唆するきっかけにもなるものであった。今後は、悲観性という将来への評価だけではなく、自尊心など現在の評価に対しても、本論文の研究結果を生かせるのではないかと考えられる。たとえば、東アジア人は自己奉仕的バイアスが欧米人よりも低いとされ、自己批判的であるとされてきたが(e.g., Heine et al., 1999)、本研究の結果を考えると、その解釈では不十分かもしれない。日本人が、課題を行う前に外的要因への悲観をし、実際の失敗後の脅威を和らげる、という本論文における結果は、東アジア人が、自己批判をすることだけに動機づけられているわけではないことを示すものではないだろうか。日本人が、外的要因への悲観のように、予め失敗後の脅威を軽減させる方略をとると、実際に失敗をしても、それほど心理的 well-being への脅威を受けない。そして、失敗後に脅威を受けていないため、「過ぎた失敗の原因を外的要因に帰属をしても意味がない。失敗を内的要因に帰属して、次は努力しよう」、と、失敗直後でも考

えることができる人が多かった可能性がある。このことは、東アジア人が自己批判動機を持つことを意味するのではなく、むしろ、自身の自尊心や心理的 well-being を保ちつつ、次の課題に向けてストレスなく努力するための方略を使っていることを、示しているのではないだろうか。本論文における知見により、今後、これまでの比較文化研究では見られなかった東アジア人の姿を、検討していくきっかけになったのではないかと考えている。

二次的コントロールの機能について

本研究の第二の貢献は、達成場面における二次的コントロールの機能について、示唆することができた点である。先行研究において、コントロールには、周りの環境を変える一次的コントロールと、環境は変えずに自身の認識を変える二次的コントロールとがあるといわれている。そして東アジア人は、一次的コントロールではなく二次的コントロールの方をよく使う、とされている(e.g., Weisz et al., 1984)。この二次的コントロールは、達成場面において心理的 well-being を保つ効果はがあるとされているものの、達成動機に対してどのような効果を持つのかについては、未だに検討されてこなかった。

研究 3、研究 4 において、日本人の間でもアメリカ人の間でも、内的要因への悲観はコントロール感と負の関連を持つが、外的要因への悲観はコントロール感との間に有意な関連は見られなかった。そして研究 6 において、日本人の間で、外的要因への悲観は心理的 well-being を維持する機能があることが明らかになった。このことから、特に日本人の間で、外的要因への悲観は二次的コントロールに近い機能を持つと考えられる。

本研究では、その二次的コントロールに近い外的要因への悲観が、日本人の間でのみ、達成動機と正の関連が見られた。すなわち、日本人の間では、一次的コントロール以外であっても、達成場面で適応的な機能を持つ、ということが示唆された。ただし、アメリカ人の間では、この傾向は見られなかった。

先行研究において、東アジア人の間では一次的コントロールよりも二次的コントロールの方が頻繁に使われる、とされている。本研究において、二次的コントロールを多く行う東アジア人は、ただ単に心理的 well-being を保つためだけではなく、達成場面で適応的に機能するためにも、二次的コントロールを使用する可能性が示唆された。

総合すると、本研究の意義は、これまで整理されてこなかった、どのような悲観性が達成場面で適応的であるのかについての整理ができたことと、更に、これまで心理的 well-being を保つという機能しか指摘されてこなかった概念が、達成場面でも適応的な方略と結びつくことが示されたことである。特に東アジア人にとっては、受ける脅威を軽減させて心理的 well-being を保つ、という一見防衛的な認識が、防衛的なだけではなく、達成場面において、望ましい結果を獲得することにもつながることが、本研究で示唆された。「自身の能力で努力し、成功しなければならない」と考え続けているよりも、「失敗をしても自分が悪いわけではない」という精神的準備をしておくことで、より達成場面で適応できる可能性が考えられる。今後は実験的検討などによっても、このプロセスについては確認していく必要がある。

本研究の限界①アメリカ人の中での悲観性の機能について

本研究における未解決点の一つが、アメリカ人の中での悲観性の機能についてである。本研究においては、アメリカ人の中では日本人の間と同様、内的要因への悲観がコントロール感や積極的方略、達成動機との間に負の関連を持つことが示されたが、日本人の間とは異なり、外的要因への悲観は、アメリカ人の中では達成に関するほかの変数との間に有意な関連を持たなかった。すなわち、アメリカ人の間でも、内的要因への悲観を持たないことが達成動機につながるということは分かったものの、日本人の間でのように、どのような悲観性が達成動機と正の結びつきを持つのか、という点に関しては、本研究では検討できなかった。

アメリカ人の間では内的／外的要因どちらに関する悲観性も達成動機と正には結びつかなかったという結果は、悲観性が達成動機とつながることを示した、悲観性のメリットに関する先行研究の知見と、矛盾しているようにも見える。しかしながら、本研究の結果をふまえて、先行研究におけるアメリカ人にとっての「悲観」とは何を意味しているのか、今後の検討が必要であると考えられる。すなわち、アメリカ人が方略として扱う「悲観性」は、「悲観」と名前がついているものの、内的要因や外的要因への悲観で測定されるような悲観性を、意味しているのか否か、という点である。たとえば防衛的悲観主義の尺度項目は、「きっと大丈夫だとわかってはいても、最悪の事態を予測する」などのように、悲観性よりも「事前の準備」に焦点を置いたものが多かった(e.g., Norem, 2001)。このことから、アメリカ人は、たとえ防衛的悲観主義を高く持つ人であっても、悲観性の具体的な側面についてまでは考えていない可能性が考えられる。すなわち、アメリカ人にとって方略としての悲観とは、何に対しての悲観、という測定ができない漠然としたものである可能性が高い。そのため、これまで扱われており、日米で同様の尺度が使われてきた防衛的悲観主義の意味するところが、日米で異なる可能性が示唆される。このことから、アメリカ人にとっての悲観性のメリットとは何か、今後より詳細に、検討する必要がある。

それと関連して、今後は制御焦点(regulatory focus)との関連も含めて検討をしていく必要があると考えられる。制御焦点とは自己制御の方略であり、理想を追求し、獲得を採求する促進焦点(promotion)と、損失を防ぎ義務を果たすことに注目する予防焦点(prevention)に分けられる(Higgins, 1997)。この制御焦点に関しても文化差が指摘されており、東アジア的な自己観である *interdependent self-construal* を持つ人は、欧米的な自己観である *independent self-construal* を持つ人に比べて、予防焦点をより頻繁に使うということが指摘されている(Lee, Aaker, & Gardner, 2000)。本研究における、内的要因への悲観、外的要因への悲観は、悪い結果のことを事前に考える傾向を示しており、制御焦点のうち、「悪い結果を避ける動機付け」である、予防焦点と関連する可能性がある。一方

で、防衛的悲観主義は、悪い結果のことを事前に考えてその結果を防ごうとする、予防焦点的な傾向がある一方で、外的要因への悲観とは異なりコントロール感に結びつくことが先行研究で指摘されている（川森ら, 2004）。そのため防衛的悲観主義は、欧米的自己観と結びつく促進焦点とも、結びつく可能性があるのである。そのために、防衛的悲観主義は、促進焦点を頻繁に使うアメリカ人の間でも、達成場面で肯定的な機能を持っていた可能性がある。一方で、本研究においてアメリカ人の間で達成場面での適応的な機能が見られなかった、外的要因への悲観は、コントロール感と結びついていないことから、予防焦点とのみ結びつくのではないかと考えられる。そして、日本人の間では予防焦点に近い変数が達成場面でも適応的な機能を示したが、促進焦点を好むアメリカ人の間ではそうした機能はなかった、という解釈が可能である。この点についても、今後の調査が必要である。

本研究の限界②外的要因への悲観と他変数との間の相関パターンの不一致について

さらに本研究では、総合的に、日本人の間で外的要因への悲観が達成動機を維持する機能を持つことが示唆されたものの、その効果量には、研究によって若干の違いが見られた。たとえば研究 2 では、日本人の間で外的要因への悲観と達成動機との間に直接の正の相関が見られたのに対して、他の研究では内的要因への悲観を統制した時にのみ、外的要因への悲観は達成場面における適応的な変数と結びついていた。

実はこれらの関連パターンの違いは、内的要因への悲観と外的要因への悲観との間の相関関係と連動していた。研究 2 では、内的要因への悲観と外的要因への悲観との間に有意な負の相関があり、この時にのみ、外的要因への悲観は達成動機と直接の、有意な正の相関を持っていた。その他の研究では、たとえば研究 3 では内的要因への悲観と外的要因への悲観との間に正の関連があり、内的要因へ

の悲観を統制した時に、外的要因への悲観と達成動機との有意な関連が見られたのである。これに対して、内的要因への悲観はそれとは関わらず、常に達成動機との間に負の関連を持っていた。すなわち研究2のように、内的要因に対して悲観をしていない人ほど外的要因に悲観をする、という調査参加者を対象としたとき、外的要因と達成動機とは直接の結びつきを持っていたのである。

つまり外的要因への悲観の、達成動機への効果量が、状況によって変動する可能性が高い、ということになり、このことは本研究の知見における限界である。しかしながら、研究2以外でも、内的要因への悲観を統制すると外的要因への悲観が達成場面における肯定的な機能との間に正の関連を持つ、という傾向は、日本人の間ではどの研究においても一貫していた。そして、研究2のように、能力などの内的要因に心配していない人ほど外的要因への悲観を高く持つときに、外的要因への悲観が達成動機と直接関連していた、という結果は興味深い。すなわち、外的要因への悲観の効果量の変動は、逆に、外的要因への悲観独自の部分が、達成動機との間に正の関連を持つ、ということをサポートする結果でもある。よって、今後の研究では、外的要因への悲観独自の部分を、より明確に抽出することが必要になると考えられる。

今後の展望

まず、本研究においては東アジア人として日本人を、欧米人として主にアメリカ人を対象とした。今後は、東アジア、欧米圏の中での文化的普遍性についても、検討していく必要がある。

更に今後は、内的要因への悲観と外的要因への悲観の組み合わせについても検討が必要である。前述したように、日本人の間では、研究2のように内的要因への悲観と外的要因への悲観とが負の関連を持つ時に、外的要因への悲観と達成動機との関連が明確に見られた。このことから、日本人の間では、外的要因への悲観が最も達成状況で適応的な機能を持つのは、内的要因への悲観が低い時、すな

わち能力などの内的な要因に対して心配をしていない時ではないかと考えられる。すなわち、内的要因に対しては心配をしていないが、外的要因に関しては何が起こるかわからない、と慎重な予測をした方が、日本人の間では達成動機が高くなると考えられる。

しかしながら、本研究においては、日本人の間で、内的要因への悲観と外的要因への悲観とが、達成動機と独立の関連を持っていた。すなわち日本人の間では、外的要因への悲観が高くても低くても、内的要因への悲観をしないことが達成場面では適応的であり、また内的要因への悲観が高くても低くても、外的要因への悲観をすることが、達成場面では適応的である、といえる。

そのため、内的要因への悲観をしていたとしても、外的要因への悲観を高く持っていれば達成動機は脅かされず、逆に、外的要因への悲観をしていなかったとしても、内的要因への悲観をしていなければ達成動機は脅かされない、ということになる。すなわち、仮に内的要因に対して悲観をしている、つまり能力などの要因を心配している状態であっても、同時に外的要因への悲観もしていれば、失敗をした時に少なくとも心理的 **well-being** を保つことができる。つまり、外的要因への悲観は、内的要因への悲観が高い時の、補償的な役割を持っている可能性が考えられる。すなわち、能力などに自信がない時には、外的要因に対して楽観をするのではなく、あえて悲観をしておいた方が適応的なのである。「だめで元々」という言葉は、失敗をした後の心理的 **well-being** を保つための認識であると考えられてきたが、達成水準自体にも、良い影響を及ぼす可能性があることが示唆された。

そして逆に、外的要因に対して悲観をしていなかったとしても、内的要因に対しても悲観をしていない状態は、自身の能力に対しても、運などの外的要因に対しても自信がある状態であるといえる。この状態も、「楽観的である人ほど達成動機が高い」という従来の指摘と一致するものであり、達成動機は保たれるであろう。

これらのことを考えると、一方で、日本人の間では、内的要因への悲観が高く、外的要因に対して悲観をしないことが、達成場面において最も非適応的であるといえる。能力などの内的な要因に自信がないときに、外的要因に対して根拠のない楽観をすることは、「奇跡が起きることを願う」や「状況が良くなることを祈る」のような、回避思考的な方略 (Lazarus & Folkman, 1985) であると考えられるためである。

アメリカ人の間では、達成動機と関連するのは内的要因への悲観のみで、外的要因への悲観は内的要因への悲観を統制すると、達成動機との間に有意な関連を持たなかった。そのため、アメリカ人の間では、内的要因への悲観さえ低ければ、すなわち内的要因に対して自信があれば、外的要因への悲観がどの高さであっても、達成動機を保てると考えられる。一方で日本人の間では、外的要因への悲観を低く持つことは、すなわち外的要因をあてにすることは、内的要因に対して自信が持てない場面では、非適応的な機能を持つ、と考えられるのである。今後は、内的要因への悲観の高低と、外的要因への悲観の高低とを、実験的手法で操作をし、それぞれの組み合わせが達成動機に及ぼす効果を検討する必要がある。

冒頭でも述べたように、昨今、日本の若者の間での学習意欲の低下が指摘されている。また、「若者の〇〇離れ」や「草食系男子」といった言葉に表されるように、何かを獲得しようとする動機付けが低い若者が、近年増加している、とされている。この理由として、「社会への希望が持てないためだ」とする主張は間違っていないだろう。しかしながら、ひとくくりに「社会への希望」を持てばよいのではなく、日本の若者には、日本の若者に適した希望の持ち方、意欲の持ち方があることが、本研究の結果から示唆された。それが、外的な要因に対してはあえて期待を低く持つておくことである。

冒頭で示した山田 (2007) の著書では、社会に希望が持てないことと、運頼みにすることは、どちらも努力をしようとする意欲を削ぐものであると指摘されて

いる。本研究の結果をふまえて言い換えると、社会において自身の内的要因を使って適応することに自信が持てないことと、運などの外的要因に対して楽観を失ってしまうことは、どちらも達成動機に対して悪影響を及ぼすものであるといえる。本研究の結果により、「何が適切な希望であるのか」という点の整理ができたといえるが、最も重要な発見は、たとえ内的要因に対して自信がなかったとしても、外的要因に期待をしないことで、意欲につながる可能性を示唆できたことである。たとえ自分の能力に自信がない時であっても、外的要因に対して悲観をしておくことで、心理的 **well-being** を維持することはできる。そのことでプレッシャーから解放され、目標設定を多少下げてでも、努力をしよう、という意欲につながる可能性がある。たとえば冒頭の、運頼みをしてフリーターになる若者ならば、社会状況の影響で夢が理想通りにはかなわない可能性を考えた方が、プレッシャーから解放され、逆に、夢を叶えるための努力につながる可能性がある。仮に夢がかなわなかったとしても、心理的 **well-being** への悪影響は少なくおさえられるためである。少なくとも日本人の達成動機を保つ上では、社会に対して希望を持つことは、必ずしも必要なことではないのである。

引用文献

- Ames, C. (1992). Classrooms: Goals, structures, and student motivation. *Journal of Educational Psychology*, **84**, 261-271.
- 荒木友希子 (2012). 学習性無力感パラダイムを用いた防衛的悲観主義に関する実験的検討 健康心理学研究, **25**, 104-113.
- Atkinson, J.W. (1957). Motivational determinants of risk-taking behavior. *Psychological Review*, **64**, 359-372.
- Atkinson, J. W. (1964). *An Introduction to Motivation*. Princeton, NJ: Van Nostrand
- Brislin, R. W. (1980). Translation and content analysis of oral and written material. In H. Triandis & J. W. Berry (Eds.), *Handbook of cross-cultural psychology: Methodology* (pp. 389-444). Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- Carroll, P., Sweeny, K., & Shepperd, J.A. (2006). Forsaking optimism. *Review of General Psychology*, **10**, 56-73.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. (1998). *On the Self-Regulation of Behavior*. New York: Cambridge University Press.
- Carver, C.S., & Scheier, M.F. (2014). Dispositional optimism. *Trends in Cognitive Science*, **18**, 293-299.
- Carver, C.S., Scheier, M.F., & Segerstrom, S.C. (2010). Optimism. *Clinical Psychology Review*, **30**, 879-889.
- Carver, C.S., Pozo, C., Harris, S.D., Noriega, V., Scheier, M.F., Robinson, D.S., et al. (1993). How coping mediates the effect of optimism on distress: A

study of women with early stage breast cancer. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 375-390.

Chang, E.C. (1996). Cultural differences in optimism, pessimism, and coping: Predictors of subsequent adjustment in Asian American and Caucasian American college students. *Journal of Counseling Psychology*, **43**, 113-123.

Chang, E.C., & Asakawa, K. (2003). Cultural variations on optimistic and pessimistic bias for self versus a sibling: Is there evidence for self-enhancement in the West and for self-criticism in the East when the referent group is specified? *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 569-581.

Chang, E.C., Bodem, M.R., Sanna, L.J., & Fabian, C.G. (2011). Optimism-pessimism and adjustment in college students: Is there support for the utility of a domain-specific approach to studying outcome expectancies? *The Journal of Positive Psychology*, **6**, 418-428.

中央教育審議会 平成 19 年「次代を担う自立した青少年の育成に向けて（答申）」 文部科学省ホームページ

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/

chukyo0/toushin/07020115.htm

Cohen, M., Ben-Zur, H., & Rosenfeld, M.J. (2008). Sense of coherence, coping strategies, and test anxiety as predictors of test performance among college students. *International Journal of Stress Management*, **15**, 289-303.

- Diener, E., & Diener, M. (1995). Cross-cultural correlates of life satisfaction and self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 653-663.
- Doron, J., Stephan, Y., Maiano, C., & Scanff, C.L. (2011). Motivational predictors of coping with academic examination. *The Journal of Social Psychology*, **151**, 87-104.
- Eccles, J., Adler, T.F., Futterman, R., Goff, S.B., Kaczala, C.M., Meece, J., et al. (1983). Expectancies, values and academic behaviors. In Spence, J.T. (ed.), *Achievement and Achievement Motives*: W, H. Freeman: San Francisco.
- Eccles, J. & Wigfield, A. (2002). Motivational beliefs, values, and goals. *Annual Review of Psychology*, **53**, 109-132.
- Eid, M., & Diener, E. (2001). Norms for experiencing emotions in different cultures: Inter-and intranational differences. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 869-885.
- Elliot, A.J., & Church, M.A. (1997). A hierarchical model of approach and avoidance achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 218-232.
- Fontaine, J.R.J. (2005). Equivalence. In K. Kempf-Leonard (Ed.), *Encyclopedia of Social Measurement: Vol.1* (pp. 803-813). San Diego, CA: Academic Press.
- 福沢愛 (2014). 悲観性の達成動機との関連について—内的／外的悲観の分類—日本パーソナリティ学会第23回大会
- Fukuzawa, A., & Yamaguchi, S. (2013). Relation between self-esteem instability and expectation and motivation after failure among Japanese

university students. In Y. Kashima, E. Kashima, & R. Beatson (Eds.), *Steering the cultural dynamics: Selected papers from the 2010 Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology*. Melbourne, Australia: International Association for Cross-Cultural Psychology, pp. 118-123.

福沢愛・山口勸・先崎沙和 (2013). 自尊心のレベル・変動性と将来への肯定的な期待との関連—遠い将来への肯定的な期待が持つ脅威軽減機能について パーソナリティ研究, **22**, 117-130.

橋本京子・子安増生 (2011). 楽観性とポジティブ志向および主観的幸福感の関連について パーソナリティ研究, **19**, 233-244.

Heine, S.J., & Lehman, D.R. (1995). Cultural variation in unrealistic optimism: Does the West feel more invulnerable than the East? *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 595- 607.

Heine, S.J., Lehman, D.R., Markus, H.R., & Kitayama, S. (1999). Is there a universal need for positive self- regard? *Psychological Review*, **106**, 766-794.

Higgins, E.T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, **52**, 1280-1300.

堀野緑・森和代 (1991). 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究, **39**, 308-315.

Hosogoshi, H., & Kodama, M. (2005). Examination of defensive pessimism in Japanese college students: Reliability and validity of the Japanese version of the Defensive Pessimism Questionnaire. *Japanese Health Psychology*, **12**, 27-40.

- 石毛みどり・無藤隆 (2005). 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連：受験期の学業場面に着目して 教育心理学研究, **53**, 356-367.
- 川森陽子・古川真人 (2004). 防衛的悲観主義を中心とした認知的ストラテジーの実験的検討 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, **7**, 48-58.
- Kernis, M.H., Brockner, J., & Frankel, B.S. (1989). Self-esteem and reactions to failure: The mediating role of overgeneralization. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 707-714.
- Kernis, M.H., Cornell, D.P., Sun, C.R., Berry, A.J., & Harlow, T. (1993). There's more to self-esteem than whether it is high or low: The importance of stability of self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 1190-1204
- Lang, J.W.B., & Fries, S. (2006). A revised 10-item version of the achievement motives scale: Psychometric properties in German-speaking samples. *European Journal of Psychological Assessment*, **22**, 216-224.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, Appraisal and Coping*. New York: Springer.
- Lee, A. Y., Aaker, J.L., & Gardner, W.L. (2000). The pleasures and pains of distinct self-construals: The role of interdependence in regulatory focus. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 1122-1134.
- Lee, Y.T., & Seligman, M.E. P. (1997). Are Americans more optimistic than the Chinese? *Personality and Social Psychology Bulletin*, **23**, 32-40.
- Maybery, D. (2003). Incorporating interpersonal events within hassle measurement. *Stress and Health*, **19**, 97-110.

- Maybery, D.J. (2004). Incorporating interpersonal events within uplift measurement . *Social Research Indicators*, **68**, 35-57.
- Morris, M.W. & Peng, K. (1994). Culture and cause: American and Chinese attributions for social and physical events. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 949-971.
- 村田英代・菊島勝也 (2009). 防衛的悲観主義者における認知的方略の認識の検討
愛知教育大学研究報告, **58**, 97-105.
- 西田保・澤淳一 (1993). 体育における学習意欲を規定する要因の分析 教育心理学研究, **41**, 125-134.
- Norem, J.K. (2001). Defensive pessimism, optimism, and pessimism. In E.C. Chang (Ed.), *Optimism and Pessimism: Implications for Theory, Research, and Practice*. Washington, D.C: American Psychological Association. pp.77-100.
- Norem, J. (2002). *The Positive Power of Negative Thinking*. New York, NY : Basic Books.
- Norem, J.K., & Cantor, N. (1986). Defensive pessimism: Harnessing anxiety as motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 1208-1217.
- Norem, J.K., & Illingworth, K.S.S. (1993). Strategy- dependent effects of reflecting on self and tasks: Some implications of optimism and defensive pessimism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 822-835.
- 大石繁宏 (2011). 文化と Well-being 島井哲志 (編) ポジティブ心理学 - 21 世紀の心理学の可能性 ナカニシヤ出版 pp. 114-131. Peng, K., & Nisbett, R.E. (1999). Culture, dialectics, and reasoning about contradiction. *American Psychologist*, **54**, 741-754.

- Pulfrey, C., Darnon, C., & Butera, F. (2013). Autonomy and task performance: Explaining the impact of grades on intrinsic motivation. *Journal of Educational Psychology, 105*, 39-57.
- Rand, K. L., Martin, A.D., & Shea, A.M. (2011). Hope, but not optimism, predicts academic performance of law students beyond previous academic achievement. *Journal of Research in Personality, 45*, 683-686.
- Robinson, W.S. (1950). Ecological correlations and the behavior of individuals. *American Sociological Review, 15*, 351-357.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Scheier, M.F., & Carver, C.S. (1992). Effects of optimism on psychological and physical well-being: Theoretical overview and empirical update. *Cognitive Therapy and Research, 16*, 201-228.
- Scheier, M. F., Carver, C. S., & Bridges, M. W. (1994). Distinguishing optimism from neuroticism (and trait anxiety, self-mastery, and self-esteem): A re-evaluation of the Life Orientation Test. *Journal of Personality and Social Psychology, 67*, 1063-1078.
- Schmitz, B., & Skinner, E. (1993). Perceived control, effort, and academic performance: Interindividual, intraindividual, and multivariate time-series analysis. *Journal of Personality and Social Psychology, 64*, 1010-1028.
- Seligman, M. (1990). *Learned optimism*. New York: A. A. Knopf, Inc.
- Seligman, M.E.P., & Csikszentmihalyi, M. (2000). Positive psychology: An introduction. *American Psychologist, 55*, 5-14.

- Shepperd, J. A., Ouellette, J. A., & Fernandez, J. K. (1996). Abandoning unrealistic optimism: Performance estimates and the temporal proximity of self-relevant feedback. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 844-855.
- 神藤貴昭 (1998). 中学生の学業ストレスと対処方略がストレス反応および自己成長感・学習意欲に与える影響 教育心理学研究, **46**, 442-451.
- Solberg Nes, L., & Segerstrom, S.C. (2006). Dispositional optimism and coping: A meta-analytic review. *Personality and Social Psychology Review*, **10**, 235-251.
- Solberg Nes, L., Evans, D.R., & Segerstrom, S.C. (2009). Optimism and college retention: Mediation by motivation, performance, and adjustment. *Journal of Applied Social Psychology*, **39**, 1887-1912.
- Spencer, S.M., & Norem, J. K. (1996). Reflection and distraction: Defensive pessimism, strategic optimism, and performance. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **22**, 354-365.
- Thompson, A., & Gaudreau, P. (2008). From optimism and pessimism to coping: The mediating role of academic motivation. *International Journal of Stress Management*, **15**, 269-288.
- 外山美樹 (2005). 認知的方略の違いがテスト対処方略と学業成績の関係に及ぼす影響 - 防衛的悲観主義と方略的楽観主義 - 教育心理学研究, **53**, 220-229.
- 外山美樹 (2011). 防衛的悲観主義者はなぜ成功するのか 筑波大学心理学研究, **42**, 21-27.
- 外山美樹 (2013). 楽観・悲観性尺度の作成ならびに信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **84**, 256-266.

- 外山美樹・市原学 (2008). 中学生の学業成績の向上におけるテスト対処方略と学業コンピテンスの影響—認知的方略の違いの観点から— 教育心理学研究, **56**, 72-80.
- Yamaguchi, S., Greenwald, A.G., Banaji, M.R., Murakami, F., Chen, D., Shiomura, K., et al. (2007). Apparent universality of positive implicit self-esteem. *Psychological Science*, **18**, 498- 500.
- Yamaguchi, S., Lin, C., Morio, H., & Okumura, T. (2008) Motivated expression of self-esteem across cultures. In R.M. Sorrentino & S. Yamaguchi (Eds.), *Handbook of Motivation and Cognition across Cultures*. (pp. 369-392). San Diego, CA; Elsevier.
- 山田昌弘 (2007). 希望格差社会—「負け組」の絶望感が日本を引き裂く 筑摩書房
- Watson, D., Clark, L., & Tellegen, A. (1988). Development and validation of Brief Measures of Positive and Negative Affect: The PANAS Scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 1063–1070.
- Weiner, B. (1985). An attribution theory of achievement motivation and emotion. *Psychological Review*, **92**, 548-573.
- Weisz, J.R., Rothbaum, F.M., & Blackburn, T.C. (1984). Standing out and standing in: The psychology of control in America and Japan. *American Psychologist*, **39**, 955-969.
- White, R. W. (1959). Motivation reconsidered: The concept of competence. *Psychological Review*, **66**, 297-333.
- Wigfield, A., & Eccles, J.S. (2000). Expectancy- value theory of achievement motivation. *Contemporary Educational Psychology*, **25**, 68-81.

謝辞

本論文を完結させるまでの数年間は、まさに悪戦苦闘の日々でした。その理由は、一重に著者の能力不足、努力不足という、内的要因によるところです。それにも関わらず、この論文を執筆する環境という、外的な要因を与えてくださった先生方には、感謝の念にたえません。

調査や実験の経験が不足したまま他学部から入学してきた著者を、時に厳しく、時にご自分の経験からも励ましてくださった、本学山口勸先生には、本当にお世話になりました。興味が四方八方に拡散し、研究の方向性をどう整理したらよいか全く分かっていなかった著者が今日、この論文を執筆できたのも、山口先生の根気強いご指導のおかげだと思っております。研究デザインはシンプルに、論文を書く時には、今ある材料から無理矢理高級料理を作ろうとしない、など、先生にいただいたアドバイスは、今後の著者の研究生生活の指針となっていくものだと思います。

また、本学の唐沢かおり先生、亀田達也先生、村本由紀子先生には、短い時間の中でも本論文を受け入れてくださり、有益なご意見をくださったことを、心から感謝いたします。いただいたコメントによって、個々の小さな調査結果の積み重ねになりがちだった本研究が、少しでも社会的に意義のあるものになったと思っております。また、ご自身もお忙しい時期でありながら、外部審査員への依頼を受けてくださった、青山学院大学の繁耕江里先生に、心より感謝をいたします。繁耕先生には、審査員としてご就任いただいているから、学習院大学の研究室にて、またメール等にて、本論文が改善されるよう、辛抱強くお付き合いいただきました。改めて、お礼申し上げます。

山口教授の研究ミーティングに所属し、ミーティング以外の場でも、本論文がなんとか形になるようなアドバイスをしてくださった今城志保氏、のんびりしがちな著者に、いい意味での焦りを与えてくれた、同期の澤海崇文氏、その他にも、長い山口研究室生活の中でお会いした大学院生の皆様には、大変良い刺激をいただきました。

また、授業のスケジュールが詰まっている中、本論文のためのデータ収集にご協力をいただいた、関西大学森尾博昭先生、東洋大学片山美由紀先生、

Maryland University の Sarah Lyons 氏にも、大変お世話になりました。お疲れのところを本論文のための調査にご協力いただいた学部生のみなさまにも、心からお礼申し上げます。

著者の愚痴や気晴らしに付き合ってくれた母や、暖かく見守ってくれた祖母、著者の博士号執筆や研究生活に理解を示してくれている夫にも、心から感謝しております。そして、本学での博士号取得を目指しながら若くして他界し、その後著者を見守ってくれていたであろう父にも、感謝の意を表させていただきます。

ここに書かせていただいた方々からも、書ききれなかった方々からも、著者の拙い言葉では書き表せないほどのご支援をたまわったことを記し、謝辞とさせていただきます。

2015年1月 福沢愛

付録

付録 1

研究 2 で使用した尺度

1. 以下の文章は、あなたのお考えにどの程度当てはまりますか。

「1=全くそう思わない」～「5=非常にそう思う」の中から選んでください。

1 (全く当てはまらない)

2 (当てはまらない)

3 (どちらでもない)

4 (当てはまる)

5 (非常に当てはまる)

(1)先がわからないとき、たいてい最も良いことを期待する

(2)私に何か良くないことが起こる可能性があるとき、それは実際に起こるだろう

(3)いつも自分の将来について楽観的である

(4)私は今までに、物事が自分の望むように進むと期待したことはほとんどない

(5)自分に良いことが起こると期待することはめったにない

(6)一般的に、自分には良くないことよりも良いことが起こると期待している

2. 将来のことを想像してください。あなたの「勉強や仕事に対する対処能力」

は、将来、どのように変わるでしょうか？「1. 悪くなる」～「5. 良くなる」の中から選び、チェックしてください。

1=悪くなる

2=少し悪くなる

3=変わらない

4=少し良くなる

5=良くなる

3. 勉強や学問の場面で、うまくいかなかった状況を思い出してください。(例：
テストで悪い点数をとった・講師や教授から良くない評価を受けた、など)

日常生活でこのような出来事を経験した時、あなたが普段、どのように考え、反応するかを思い出してお応えください。もしも、このような状況を経験したことがない場合は、このような状況を自分が経験したらどのような反応をするか、想像してお応えください。

このような状況では、今後同じ課題や科目に続けて取り組もうと、どの程度やる気になるでしょうか

1= 全くやる気にならないだろう

2= やる気にならないだろう

3=どちらともいえない

4=やる気になるだろう

5=非常にやる気になるだろう

付録 2:

研究 2 で使用した尺度

1. 以下のような文章に、あなたのお考えにどの程度当てはまりますか。1（全く当てはまらない）～5（非常に当てはまる）の中からお選びください。

1（全く当てはまらない）

2（当てはまらない）

3（どちらでもない）

4（当てはまる）

5（非常に当てはまる）

(1)先がわからないとき、たいてい最も良いことを期待する

(2)私に何か良くないことが起こる可能性があるとき、それは実際に起こるだろう

(3)いつも自分の将来について楽観的である

(4)私は今までに、物事が自分の望むように進むと期待したことはほとんどない

(5)自分に良いことが起こると期待することはめったにない

(6)一般的に、自分には良くないことよりも良いことが起こると期待している

2. 「勉強や仕事での成績」という側面に関して、あなたは自分の将来に、どの程度楽観的、あるいは悲観的ですか。1（非常に悲観的）～7（非常に楽観的）の中からお選びください。

1（非常に悲観的）

2

3

4（悲観的でも楽観的でもない）

5

6

7 (非常に楽観的)

3. 以下に、学業や仕事での成績という側面でああなたがうまくいったり、目標達成したりすることを、邪魔するような状況をリストしてあります。目標達成に関して、以下のような状況は、あなたの将来にどの程度起こり得ると思いますか。1 (全く起こり得ない) ~7 (非常に起こり得る) の中からお選びください。

1 (全く起こりえない)

2

3

4 (どちらでもない)

5

6

7 (非常に起こり得る)

- (1) うまくいったり目標達成するための十分な能力がない
- (2) うまくいったり目標達成するための十分なエネルギーがない
- (3) うまくいったり目標達成するための十分なモチベーションがない
- (4) うまくいったり目標達成するための十分な努力ができない
- (5) 状況が難しく、うまくいかなくなる
- (6) 偶然の要因によって、うまくいかなくなる
- (7) 運の悪さによって、うまくいかなくなる

4. 「勉強や仕事での成績」という側面に関して、あなたは、どの程度努力しようと思いますか。1 (全く思わない) ~7 (非常にそう思う) の中からお選びください。

- 1 (全く思わない)
- 2
- 3
- 4 (どちらでもない)
- 5
- 6
- 7 (非常にそう思う)

付録 3

研究 3・研究 5-1 で使用した尺度

1. 学業や仕事での成績という側面に関するあなたの将来は、あなた自身の手で、どの程度コントロール可能だ（変えることができる）と思いますか。1（全くコントロールできない）～7（非常にコントロールできる）の中からお選びください。

- 1 (全くコントロールできない)
- 2
- 3
- 4 (どちらでもない)
- 5
- 6

7 (非常にコントロールできる)

2. 以下に、学業や仕事での成績という側面でああなたがうまくいったり、目標達成したりすることを、邪魔するような状況をリストしてあります。目標達成に関して、以下のような状況は、あなたの将来にどの程度起こり得ると思いますか。1 (全く起こり得ない) ~7 (非常に起こり得る) の中からお選びください。

1 (全く起こりえない)

2

3

4 (どちらでもない)

5

6

7 (非常に起こり得る)

- (1) うまくいったり目標達成するための十分な能力がない
- (2) うまくいったり目標達成するための十分なエネルギーがない
- (3) うまくいったり目標達成するための十分なモチベーションがない
- (4) うまくいったり目標達成するための十分な努力ができない
- (5) 状況が難しく、うまくいかなくなる
- (6) 偶然の要因によって、うまくいかなくなる
- (7) 運の悪さによって、うまくいかなくなる

3. 「勉強や仕事での成績」という側面に関して、あなたは、どの程度努力しようと思いますか。1 (全く思わない) ~7 (非常にそう思う) の中からお選びください。

1 (全く思わない)

2

3

4 (どちらでもない)

5

6

7 (非常にそう思う)

付録4

研究4で使用した尺度

1. この授業の最終試験における成績は、あなた自身の手で、どの程度コントロール可能だ（変えることができる）と思いますか。1（全くコントロールできない）～7（非常にコントロールできる）の中からお選びください。

1 (全くコントロールできない)

2

3

4 (どちらでもない)

5

6

7 (非常にコントロールできる)

2. この授業での試験に関して、あなたは以下のような考え方を、これまでどのぐらいしてきましたか。1（全くしなかった）～7（非常によくした）の中からお選びください。

1（全くしなかった）

2

3

4（どちらでもない）

5

6

7（非常によくした）

試験について、どうにでもなれと思う
悪い結果にはならない、と楽観的に考える
勉強方法を工夫する
試験について、なるようになれと思う
良い結果になる、と考える
テスト対策を立て、それに従う
試験について無理にでも忘れるようにする
試験についてあまり考えないことにする

3. 以下に、この授業で良い成績をとることを、邪魔するような状況をリストしてあります。以下のような状況は、この授業の試験までにどの程度起こり得ると思いますか。1（全く起こり得ない）～7（非常に起こり得る）の中からお選びください。

1（全く起こりえない）

2

3

4 (どちらでもない)

5

6

7 (非常に起こり得る)

- (1) うまくいったり目標達成するための十分な能力がない
- (2) うまくいったり目標達成するための十分なエネルギーがない
- (3) うまくいったり目標達成するための十分なモチベーションがない
- (4) うまくいったり目標達成するための十分な努力ができない
- (5) 状況が難しく、うまくいかなくなる
- (6) 偶然の要因によって、うまくいかなくなる
- (7) 運の悪さによって、うまくいかなくなる

4. この授業での試験に向けて、あなたは、どの程度努力しようと思いますか。1 (全く思わない) ~7 (非常にそう思う) の中からお選びください。

1 (全く思わない)

2

3

4 (どちらでもない)

5

6

7 (非常にそう思う)

付録 5

研究 6 で使った尺度

1. 今日一日を振り返ってください。今日一日で、以下のような感情を、あなたはどの程度感じましたか。1（全く感じなかった）～5（非常に感じた）からお選びください。

1（全く感じなかった、あるいはわずかしかなかった）

2（少し感じた）

3（まあまあ感じた）

4（かなり感じた）

5（非常に感じた）

(1) 興味を持った

(2) 悩んだ

(3) わくわくした

(4) うろたえた

(5) 強気な

(6) 罪悪感を持った

(7) おびえた

(8) 敵意を持った

- (9) 熱狂した
- (10) 誇らしい
- (11) いらだった
- (12) 機敏な
- (13) 恥じた
- (14) 感激した
- (15) 緊張した
- (16) 決心した
- (17) 用心した
- (18) 神経質になった
- (19) 活発になった
- (20) 心配した

2. 今日一日を振り返ってください。以下に、ネガティブで否定的な出来事をリストしてあります。それぞれの出来事は、今日一日で起こりましたか。また、起こったとしたら、あなたはそれによってどの程度煩わされましたか。0～5の中からお選びください。

- 0 (このような出来事は起こらなかった)
- 1 (このような出来事は起こったが、全く煩わされなかった)
- 2 (このような出来事が起こり、少し煩わしかった)
- 3 (このような出来事が起こり、まあまあ煩わしかった)

4 (このような出来事が起こり、かなり煩わしかった)

5 (このような出来事が起こり、非常に煩わしかった)

(1)勉強・学業に関して、うまくいかないことがあった

(2)勉強すべきことや授業での課題等の期日に関して (間に合わなさそう・間に合わなかったなど) うまくいかないことがあった

3. 今日一日を振り返ってください。以下に、ポジティブで肯定的な出来事をリストしてあります。それぞれの出来事は、今日一日で起こりましたか。また、起こったとしたら、あなたはそれによってどの程度、気持ちが高まりましたか (ポジティブな嬉しい気持ちになりましたか)。0~5の中からお選びください。

0 (このような出来事は起こらなかった)

1 (このような出来事は起こったが、全く気持ちは高まらなかった)

2 (このような出来事が起こり、少し気持ちが高まった)

3 (このような出来事が起こり、まあまあ気持ちが高まった)

4 (このような出来事が起こり、かなり気持ちが高まった)

5 (このような出来事が起こり、非常に気持ちが高まった)

(1)勉強・学業に関してうまくいった

(2)勉強すべきことや授業での課題等の期日に関して (間に合いそう・間に合ったなど) うまくいった

4. 明日のことについてお考えください。明日、学業や仕事での成績という側面に関して、あなたはどの程度努力しようと思いますか。1（全く思わない）～7（非常にそう思う）の中からお選びください。

1（全く思わない）

2

3

4（どちらでもない）

5

6

7（非常にそう思う）